理事長登壇 ④

釧路協会理事長
小田原恒雄



　日本協会「ハンドボール」編集子より、地方に芽生えつつある地方協会のなかのさらに地方協会ともいうべき組織の現状と日本協会、日本のハンドボール界に希望することがあったらとの要請がありましたが、今のところ大地に足の着いた協会に育てることに追われており遠慮したいのですが、約束の期日が過ぎましたので、当協会の生い立ちと現状を心つくままに報告させていただきます。

　北海道のうちでも通称道東地方は長い間ハンドボール競技の真空地帯とも言うべき地域でした。私が当地に赴任して体育専攻学生や一般学生を対象に、この種目を体育実技科目として開設し続けて早や二十三年の才月を経ようとしています。この教え子の幾人かの協力を得て、中学生や高校生にハンドボールの持つ特性を体験させ、社会体育振興の一助にでもなればと思い学校ハンドボール同好会を創立したのが約五年前でした。

　頭初は大学生以外は他のクラブとの掛持ちであったが、次第に単独のクラブチームに育つようになった。特に高校には大学のクラブ強化と社会人チームの育成と言う面から力を入れて開拓した結果、チームはもちろん力量においても近年次第に充実してきたように思われます。しかし、今少しの力不足の対策には中学生層の開発が急務と思い、学校体育やクラブ指導者を対象に技術研修会を実施し、学校体育の運動教材として取扱うよう働きかけ、また、昭和四十五年には今までの学校関係者の同好会と言う組織から、この競技を愛好する凡ての人々を対象に改組し、当地域の体育協会にも正式加盟するまでに成長できたわけです。そして昨年度は北海道協会関係者の御力添えで、当市の中学校クラブチームを名古屋市で開催された中学生全国大会に北海道代表として出場させていただき、また北海道教員団チームとして多数の所属会員を鹿児島国体に送り出すことができ、当市にとり数少ない全国大会出場種目の一つとして地域社会を啓発することができました。

　現在のところ北海道協会、日本協会加盟が一応の目標ですがスポーツ人口が増えてもチーム数の増加にならない、いわゆる、未組織人口が増えるだけと言う現象である。これには社会環境の特徴に対応した組織づくりをすすめる必要があろうかと考えております。

　また、一昨年、昨年の二年続きで北海道協会の全面的な協力を得て、技術研修会と審判法の講習会をそれぞれ三日間にわたって実施し、一般愛好者、小中学校や高校教員、大学のクラブ員、体育学科専攻学生を多数受講させ、指導者層の拡大をはかり、本年はそれらの指導者を中心に社会体育活動との結びつきでスポーツ少年団の育成や、学校体育関係者のサークル活動と運動教材の実施、加えて昨年あたりから中・高卒業生より相談をうけている未組織者のチーム作りと、このような人達をスポーツ教室（大学の開放講座形式や市教育委員会の社会体育のスケージュールとして）のような形で継続的に活動できる場を与え、その組織化をはかりたいと思っております。

　とに角、レジャースポーツと異なり苦しみの中からのみ真の喜びを見出し得る。鍛え抜かれたスポーツの良さを若い人達に味わってもらいたいものだと思い、所属協会員とともに暗中模索の協力を続けている現在です。

　なお、年間のスケジュールは、霧の多い特異な気候の地方であることと、標準のコートがとれる屋内施設が大学の体育館のみということもあって、折角計画した大会も延期や合併が余儀なくされることが多く施設の確保も悩みの種になっております。しかし、昨秋には当協会（含同好会）創立五周年記念行事を道協会の祝福を受けて施行することができました。北海道のように広大な地方では古い伝統的なスポーツに比較して、ハンドボールのような普及度の低いスポーツに対する理解が不足しているし、且つ理解しようとする積極性も乏しいようです。このようなことは日本協会自身の悩みと相似しているように思われ、その打開策に何らかの形で力を合わせなければならぬように思えます。

　一方、北海道の学生諸君の間にも愛好者が次第に増えつつあり、「北海道学生ハンドボール連盟」に六つの大学が加盟し独立することになりました。現在事務局が北海道大学にあり今後の活躍が期待されていることを附記しペンをおきます。

「ハンドボール」3月号（第106号）目次

【表紙写真】世界選手権（アジア予選）めざす女子全日本候補第一次強化合宿
【撮影・山田真市】

田村会長 荒川理事長体制支持さる

―全国理事会・評議員会開く―

新登録制度「一般3分割」を正式承認

日本協会は2月10日午後2時30分から東京・岸記念体育会館で48、49年度新役員による全国理事会を開いた。

公労協ストなどで理事の出足が心配されたが25名が出席（定数33名以内＝成立。欠員1、未決定地域1、欠席6）し、理事長に荒川清美氏（51才、日体大教授）を4選したほか、新専門部長7氏をふくむ12名の常務理事を決定。

このほか、本誌前号既報のとおり日本協会登録規程の抜本的改正として一般をA、B、Cランクに三分割することを正式承認、48年度日本協会納入金、全国事業などが議決された。

新年度の副会長は翌11日午前10時から岸記念体育会館で行われた定期全国評議員会で協議の結果、保坂周助（神奈川）西敏郎（学連）渡辺和美（東京）林達夫（愛知及び実連）徳永陸繁（高体連）の現役5氏の留任が決まった。会長は本誌既報のとおり、1月21日の臨時全国評議員会で田村正衛氏（61才、三重協会会長）の三選が決められ、田村ー荒川体制は全国の支持を得て新しい目標に向かい力強い第一歩を踏みだした。


田村会長


荒川理事長

中学部担当に栗脇氏

競技3部長（技術・勝 審判・安藤 普及・渡辺）は留任

注目の理事長選出は、田村議長（会長）からの選出方法を問う発言に対し、一部の理事から理事長推せん委員会をこの場で編成し候補者を推し一人の場合は信任を問い複数の場合は投票で決する提案が出され了承、ただちに推せん委員として森田、石切山、藤田、中沢ら7理事を選出、田村会長をまじえて別室で約10分の協議の末、荒川清美氏を引きつづき推せんすることにまとまった。

森田代表のこの報告に、全理事が拍手で応え「荒川理事長四選」は極めてスムースに決定した。

引きつづき、常務理事の選出に議論が進んだが、「会長、理事長へ一任」「常務理事数を理事定員の3分1の程度に。（注、46～47年度は18名）」という意見が強く、田村会長、荒川理事長が別室で協議を行った。

その結果、新機構～別掲～にそった人選として技術部担当(部長)に勝繁夫（立大出）、審判部担当（同）に安藤純光（法大出）、普及指導部（同）担当に渡辺慶寿（日体大出）、編集部（同）担当に藤本強（東大出）の各氏が留任、財務部担当は部長に神田清氏（日体大出）が留任のほか、新たに嶋田新太郎氏（日体大出）が総務部担当を兼ねて参加、また会計担当理事を新任することになり中川種弥氏（早大出）が決まった。

総務部担当は杉山茂氏(慶大出)が居残ったほかは光島儀雄（日体大出）、滝口三郎（明大出）、大野金一（東大出）氏とメンバーを一新、嶋田氏を加え5人の〃大世帯〃となりこれまで理事長が兼任の形を採って来た総務部長のポストは杉山氏に正式決定した。

新機構最大の焦点とみられた新設の中学部担当は、昨年第1回全国中学生大会を開いた栗脇嶷氏（日体大出）の実績が高く評価され、初代部長となった。

加盟団体理事長会議実施へ

この新常務理事陣（理事長をふくめ13名）について「これまで濃かった加盟団体色がうすれたことで円滑な運営ができないのではないか」（横地理事）とする不安も示されたが、荒川理事長は「加盟団体理事長会議を少くとも二カ月に一回は招集し、意志の疎通を企りたい」と回答、了承された。

この件について会議後、杉山総務担当も「加盟団体理事長・各専門部長合同会議をつとめて開くつもりだ」といっているが、いずれにせよミュヘン・オリンピックの予選ー本大会に備えて拡張一方であった常務理事陣が縮小され、一般理事との比率がほぼ1対2となったことは常務理事会の責任がいちだんと増す一方、田村ー荒川体制の自信がうかがえるといえるだろう。

難行するユーゴ招待問題

人事問題以外で大きな論議となったのはユーゴの招待問題と新登録制度である。

ユーゴについては、ユーゴ側が往復航空旅費、国内経費一切日本側負担（推定約千三百万円）を示してきたため、オリンピック金メダル国を是非招きたいとしながらも経済事情の悪化で有力な後援者（スポンサー）が見つからぬことや航空旅費の大幅な割引きも未確定要素が多いなど資金獲得に難行、しかし一試合約百七十万円の均等割りで開催希望をつのるのも問題があるなどの意見が百出、結局会長、副会長、理事長、総務部長による〃判断〃を3月初旬までにつけることでこの場はまとまった。

1月以来、会長、副会長、理事長はスポンサー探しに奔走しており、席上、田村会長から男子実業

団の有力5チームが、単独対戦することを条件に計五百万円のギャランティを示したことも報告された。しかし残り八百万円の内、最大限に見込んでも三百万円相当の資金獲得が限度というみかたが圧倒的で、一試合均等割り以外に方法がないというところまで議論は押しこまれている。

　残る3週間程度でどの程度まで日本協会が資金調達、割引き交渉ができるか。新体制はのっけから大難題をかかえたといってもよさそうだ。

成功期待の新・登録制度

　新登録制度については、別面解説のとおりだが、一般をA、B、C三分割にしたことによるAからB、さらにはCへの〝転向〟によって生じる収入減の危惧はいぜん消えていず、重ねて荒川理事長から47都道府県協会と各チームの協力が声を大にして求められた。

　日本協会が財政危機ともいわれる現時点で、なおこのような施策を示したのは、斯界の人口確保、国内スポーツ界での位置づけにつながることはもち論、いわゆるクラブ対策へ目を注ぐ第一弾にもなるわけで、ハンドボールを市民スポーツとして定着させる大きな期待も秘んでいる。

　荒川理事長は1月の全国理事会後「若干の収入減は、それだけクラブ対策に費用をかけたと思えばよい」と非公式の席上ながら語っており、それだけに全国各チームがもれなく、日本協会の姿勢と主旨を理解のうえ「一般登録」につとめられるよう期待してやまない。

　加盟金、登録金、オリンピック基金については別面詳報のとおりだが、オリンピック基金は51年度までは、「モントリオール基金」と銘打つことになった。

　また、加盟金については登録チーム数に比例して金額を決めてはという提案もあったが、今後の研究課題にまわされた。

　なお、会長推せん理事（定数14名以内）は欠員1のまま承認されたが、田村会長から当分、補充は行わぬことが明きらかにされている。

西副会長ら5氏留任へ
体協評議員には荒川理事長

定期全国評議員会

◇2月11日午前10時　◇岸記念体育会館　◇出席者　田村会長。徳永（高体連）、田中（実連・代）、福島（宮城・代）、熊田（福島・代）、宮川（茨城）、伊藤（愛知・代）、柳井（山口・代）、関（福岡）、志田（福井・代）、委任状20＝計30・成立　◇オブザーバー　藤松（学連）、渡辺（新潟）

　理事長、常務理事陣の紹介と承認のあと、田村会長から新年度副会長として現役5氏の重任の要望があり承認、さらに体協派遣役員を

▽日体協評議員　荒川　清美
▽JOC委員　渡辺　和美
▽国体委員　荒川　清美

とすることが発表され、異議なく決まった。荒川氏の日体協評議員は初。また監事は山田稔、古賀健一郎両氏が推されたが古賀氏が辞退、残り1名とともに今後、会長、副会長、理事長が話合うことになりそう。また、第5回世界女子選手権アジア予選の日本選手団長に田村会長を推すという全国理事会案を承認。人事問題については、常務理事に加盟団体系の人材が少い懸念が田中評議員代理（実連）から質された程度で終った。

　予算問題では加盟金、登録金などはいずれも全国理事会案が認められたが、関評議員から「一般Cの採用は地方協会財政にも波及する」との発言があったが、荒川理事長は「各県内での一般チームの登録はランク制を布かなくてもよいわけだし、これまで県協会段階でストップしていた一般チームの日本協会登録料として300円（他にモントリオールオリンピック基金500円）を納めるように指導して欲しい」と回答した。

日本ハンドボール協会新機構

会長 — 全国評議員会（52名） — 47都道府県協会 …… 5加盟団体
副会長
監事
全国理事会（33名以内）
理事長
中学部
総務部（総務・企画・国際渉外・広報）
編集部
技術部
審判部
普及指導部
強化委員会（有識者を含む）
財務部（会計担当）
事務局

昭和48.49年度日本協会役員（会長.副会長.理事.監事）

会長	田村　正衛		
副会長	保坂　周助	西　敏郎	渡辺　和美
	林　達夫	徳永　隆繁	
理事長	荒川　清美（会長推）		
理事（○印は常務理事）	石切山稔治（北海道）	森　恭一（東北）	
	入江　暢一（関東）	渡辺五郎兵衛（北信越）	
	○栗脇　嶷（東海）	森田　正英（近畿）	
	未定（中国）	越智　武（四国）	
	藤田　八郎（九州）		
	中沢　重夫（学連）	藤松　博（学連）	
	清水　正（高体連）	○鵜田新太郎（高体連）	
	泉　正明（実連）	横地　宇吉（実連）	
	山田　計（教職員連）	片瀬喜代次（教職員連）	
	富永　劭（自衛隊連）	早坂　勢三（自衛隊連）	
	○安藤　純光（会長推）	○藤本　強（会長推）	
	久田　暁（会長推）	○神田　清（会長推）	
	○光島　磯堆（会長推）	○中川　稲弥（会長推）	
	西川　明夫（会長推）	○大野　金一（会長推）	
	○杉山　茂（会長推）	○滝口　三郎（会長推）	
	○渡辺　慶寿（会長推）	○勝　繁夫（会長推）	
監事	山田　稔		
海外駐在代表（常務理事会で決定）			

（注）理事は1，監事は2が欠員

また、48年度事業予算については、執行部交替時期にあたり第一次査定段階の数字が発表され、なお収支のバランスをとるには約百三十万円のカットが必要だ、という説明が付された。しかし、この会議に不確定要素の残る数字が示されたことから、役員交替期の全国会議のもちかた、さらには全国評議員会のありかた（別面詳報）にまで論の及ぶ思わぬ展開となった。

昭和48年度日本協会事業

- 世界女子選手権アジア予選日本ー韓国4月12．14日（東京・大阪）
- 第11回日独親善試合ギョッピンゲン招待＝4月15～18日（名古屋ほか）
- 沖縄特別国体高校女子トーナメント5月4～6日（コザ市営体育館）
- 第5回全日本自衛隊選手権5月24～26日（東京・駒沢）
- 第3回日韓女子社会人交流5月下旬（全国各地）＝予定
- 第7回（女子第2回）日韓学生交流6月上旬（韓国各地）
- 昭和48年度全国実業団トーナメント6月17～20日（福井市）
- 第20回NHK杯全日本選抜大会6月22～24日（大阪市）
- 第14回全日本実業団選手権女子の部7月3～8日（岐阜市）
- 第14回全日本実業団選手権男子の部7月11～15日（熊本市）
- 第24回全日本高校選手権8月2～7日（四日市市）
- 第16回全日本教職員選手権8月10～13日（水海道市）
- 第6回日韓高校交歓スポーツ競技会8月中旬（東京）＝予定
- 第17回国際審判員会議8月（ブルガリア）
- 第2回全国中学生大会8月17～19日（愛知県青少年公園）
- 西独女子ラインハウゼン招待9月（全国各地）・検討中
- ユーゴナショナル招待9月（全国各地）・交渉中
- 第23回（女子第5回）全日本学生選抜東西対抗9月（名古屋市）
- 第28回国体ハンドボール競技10月14～18日（佐原市）
- 第16回（女子第9回）全日本学生選手権11月（東京）＝予定
- 第3回日韓男子社会人交流11月（韓国各地）
- 第5回世界女子選手権12月7～16日（ユーゴ）
- 第8回世界男子選手権予選49年1月15日迄に終了＝詳細未定
- 第8回世界男子選手権49年2月28～3月10日（東ドイツ）

中学生大会

8月・愛知県で開催

このほか、48年度事業については、ユーゴ招待に関して全国理事会同様の議論を経て会長を中心とした新執行部の再検討を要望、国内事業は別表のとおり承認した。

第2回全国中学生大会は8月17日から3日間、前年同様名古屋市郊外の愛知県青少年公園球技場に男女とも全国9ブロック代表と愛知県代表各1校によって行われることになり、昨年強い要望のあった参加校の増加は来年以降に研究することとなった。

また、6月のNHK杯は男子が実業団2、学生、教職員各1、女子が実業団3、学生1と決まり、代表チームの選考は各加盟団体に一任されるとしたが実連は大会の性質上日本協会が行うべきだとして選考の一切の権限を返上した。

12月の全日本総合選手権の出場枠は全国理事会案として示された

	【男】	【女】
前年度優秀	2	2
全日本学連推せん	4	2
全日本実連推せん	3	4
全国高体連推せん	1	1
全日本教職員連推せん	2	…
全日本自衛隊連推せん	1	…
全国社会人代表	2	1
次年度国体開催地代表	…	1
開催地代表	1	1
	16	12

上記の数字を承認した。前年度優秀チームは男子が湧永薬品（大阪）大崎電気（埼玉）、女子が東京重機（東京）大洋デパート（熊本）、また男子社会人代表は「日本協会A登録で「クラブの基準」の適用内のチーム」に限定、女子社会人代表も「A登録」が条件である。

8月の第17回国際審判員会議（IHF主催）への派遣は国際ハンドボール連盟の公式通知をうけとってから協議する、という審判部の意向を認めた。

四つの日韓交流のうち注目されるのは女子学生が初めて遠征を果たすことと、男子社会人交流で実連が「実業団ジュニア選抜」を送る予定としていることだ。高校女子の交流はいぜん未定。

日本協会規約の一部改正

日本協会は48年4月1日以降、日本協会規約を次のように改正すると発表した。

▽第3条（組織）本会は各都道府県においてハンドボール競技を統轄代表する協会で組織する。

▽第14条（役員）の八 理事33名以内 （旧規約は35名以内）

▽第17条（理事）理事は次の団体で推薦し議決を経て会長が委嘱する

一、第26条の規定による地区連盟9名 （旧規約は10名）

▽第21条の九（追加）放送権料。日本協会の主催または共催する大会、試合に対して放送権料が支払われた場合、その10％を日本協会へ納入する。

▽第26条（地区連盟）本会は各都道府県協会の運営を円滑にするため評議員会の議決を経て、地方別に地区連盟を置くことができる。

▽附則の表のうち九州地区に沖縄県を組み入れ、沖縄地区を削除。

世界女子選手権アジア予選

審判員は日韓両国で担当

4月、東京・大阪での開催が確定

国際ハンドボール連盟（IHF）は、第5回世界女子選手権アジア予選日本―韓国の2試合を日本で開催することを了承、審判員については、第1戦を日本側、第2戦を韓国側でそれぞれ運行するように指示した。

日本協会は、本誌既報のとおり4月12日に東京体育館、14日大阪市中央体育館で行う準備をしており、ただちに具体的な運営について対策をこうじることになった。

IHFの当初案は他地域のカード（ノルウェー対フランスなど6試合）と同よう、それぞれの国で1試合ずつを行う「ホーム・アンド・アウェイ」方式だった。

なお、2月28日現在、韓国側の反応は伝えられていない。

IHFの指示は、1月末にアジア地域選出理事渡辺和美氏（日本協会副会長）あてに伝えられたもので、日本協会筋は、昨秋来、地域単位にハンドボールを普及拡充させようとするIHFの姿勢の最初の表れとして評価している。

特に、審判員についてはこれが慣行となって今後のアジア地域諸大会にも適用されれば、開催国の経費面での負担は著しく軽減されることになるわけだ。

日本側審判員（2名）は、国際審判員名簿にリストアップされた8氏（＝本誌既報）のなかから審判部が選出、3月末に発表することになっている。

メンバー提出は3月12日？

日本協会では、ソウルに国際規格（40m×20m）のコートがないという判断のもとに昨年末から日本での2試合開催を考慮しており、オリンピック予選（46年11月）の経験も手伝って、大会そのものの運営については心配をしていないが、男女を通じてはじめて日韓ナショナルチームの試合を両国審判員が担当することと、使用球などで早急に韓国協会と打合せすることにしている。両国メンバー（役員4、選手16）の提出は3月12日の予定。

なお、1勝1敗の場合は2試合の合計得失点差で優劣を決めるがそれでもなお同点あるいは2試合とも引き分けのケースは、どのように措置するか未定で日韓両国の話し合いとともにIHFの指示をあおぐことになりそうである。

〔編集部注〕 1勝1敗で得失点差も同じ、及び2試合とも引き分けの場合、ヨーロッパの慣例では第三者国で〝決勝〟（3回戦）が行われる。

しかし、これも決定的なものではなく日時が切迫していたり、更に第三国での試合でも優劣がつかなかった時には抽せんによって決められる。女子の場合第三回世界選手権の予選ハンガリー―東ドイツがこのケースになり、ハンガリーが抽せん勝ちをし、優勝した例もある。

男子もイスラエルと予選

世界選手権

国際ハンドボール連盟（IHF）は2月24日ベルリンで来春2月東ドイツで開く第8回世界男子選手権と地域予選の組み合せを発表した。

同選手権は、これまでどおり16ケ国の参加で行われ、ミュンヘンオリンピックの上位8ケ国には自動的出場権がすでに与えられていた。1月末の〆切日までにシード8ケ国のほか日本など24ケ国が申しこんだため、各大陸別の予選（ヨーロッパ5、アジア、アメリカ、アフリカ各1）が義務づけられ、日本はイスラエルと今秋10月15日から49年1月15日までにアジア代表権を争うことになった。

このカードに勝てば、本大会では東ドイツ、ソビエト、アメリカ大陸代表らとともに予選リーグC組に出場する。

○……組み合せ……○

◇A組　チェコ（ミュンヘン・オリンピック2位）、西ドイツ（6位）ヨーロッパ予選第1群（アイスランド、フランス、イタリア）の勝者、同第4群（デンマーク、ルクセンブルグ、ベルギー）の勝者

◇B組　ルーマニア(3位)、スウェーデン(7位)、ヨーロッパ予選第2群（ポーランド対オランダ）の勝者、同第5群（スペイン、オーストリア、ポルトガル）の勝者

◇C組　東ドイツ(4位)、ソビエト(5位)アジア予選・日本対イスラエルの勝者、アメリカ予選（アメリカ、カナダ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン）の勝者

◇D組　ユーゴ(1位)、ハンガリー(8位)、ヨーロッパ予選第3群（ノルウェー対フィンランド）の勝者、アフリカ予選（チュニジア、エジプト、アルジェリア、ギニアの勝者）

新・登録制度実施本決まり

一般C登録料は三百円

本誌既報のとおり日本協会は底辺の拡大とハンドボールの市民スポーツへの積極参加を目的に登録制度の一般種別をA、B、Cの三ランクに細分することを2月10日の全国理事会、11日の同評議員会で正式承認、その登録料なども決定した。
このほか、各種別の登録金、加盟金、オリンピック基金（新年度から「モントリオール・オリンピック基金」と呼称）なども議決された。昭和49年度の日本協会登録〆切日は一般Cを除き5月31日。登録用紙（横書きに改正）は4月初旬までに日本協会から各都道府県協会あて送られる。

国体専用の「一般B」

新・登録制度の焦点ともいうべき一般（成人）の細分化は、昨年11月の月例常務理事会で総務企画部から提案されて以来、じっくりと、しかしトントン拍子に実現へ向かった。

高校、学生を含めた新登録料は別表のとおりだが、一般への登録は初年度ということもあってかなりの混乱を招きそうだ。

まず一般Aだが、これは従来とまったく同じである。国内で行われるあらゆる大会への参加資格を持つ。いわゆる実業団、教職員、自衛隊の有力チームはすべてこの部門へ包含されるわけだ。

一般Bは新設である。近年、国体だけを目指すチームが多くなり「年1回国体だけのために実業団教職員などと同じ登録料を支払うのは不合理だ」という声が主としてクラブの間から寄せられていた。日本協会は全日本クラブ選手権（仮称）を開けばこうした不満もなくなるとして、具体案を練ったが思うように行かず、結局、登録料を下げて対処することになったものだ。

「一般C」大きな反響

一般Cの新設は本誌前号で報道と同時に、予想どおり大きな反響がおこり、報道関係者も関心を示している。このランクに登録されるのは文字どおり底辺で活動しているチームだ。出場できる大会の限度はブロッククラブ大会といったところまで。

本誌などへ寄せられた意見から推すと、すっかり姿を消していた大学OBクラブがこれを機に日本協会へカムバックしようとしているのをはじめOG間に好評をもって迎えられた感じ。兵庫県の一読者からは「去年大学を卒業してある会社に入り、私が中心となってハンドボールチームを造った。10人のメンバーのうち7人は未経験者だが是非C登録したい」というハガキも来ている。

日本協会の狙いは〝財源〟ではなく、ハンドボール人口の確保と獲得にあるのだから、発表後一ヶ月足らずで早くもよい方向に受けとられているとみてよかろう。

なお、一般Cに関しては特に5月31日を登録の〆切期限に限定せず年間いつでも手つづきを受けつける予定だ。（一般A、B、学生、高校はこれまでどおり新設チーム以外は5月31日〆切り）

オリンピック基金は値下げ

個人登録料については全国評議員会で〝全廃〟の提案が出たが、今後の研究課題にするとして、当分現行のままに据え置かれた。

オリンピック基金は、前年度は「オリンピック・イヤー（開催年）」の特別額として高校500円、その他は千円だったが、今年度からは再び積み立てを目的にした額におさえ、イメージアップを企るため「モントリオール・オリンピック基金」と呼ばれることになった。

機関誌購読料は47年度と同額で年間11回発行で千八百円（1部売価は二百円）。なお、高校チームは48年度から登録料（千五百円）とモントリオール・オリンピック基金、機関誌購読料(計二千百円)を別途請求するたてまえに改めた。

このほか日本協会領価品の価格はルールブック（一冊五百円）、テキストブック（一冊三百円）、審判着一セット五千円（上衣三千二百円、パンツ千円、ストッキング八百円＝いずれも予約制、今年度分〆切り済み）などである。

役員協力金の徴収は保留

昨年度徴収した役員協力金（注各組織、各加盟団体一律二万円）については全国理事会で議論となり、48年度予算の補正編成時に改めて協議することに決まった。

日本協会加盟金（一都道府県協会当たり・年額）
▽登録チーム11以上の協会 二〇〇〇〇円
▽登録チーム10以下の協会 一〇〇〇〇円

日本協会新登録料金（単位円）

種別	出場できる大会	登録料	個人登録料	モントリオール五輪基金	機関誌講読料
高校	あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	一五〇〇	／	三〇〇	一八〇〇
学生	あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	三〇〇〇	一人一〇〇	五〇〇	一八〇〇
一般 C	全国大会(国体を含む)の予選を兼ねぬブロック大会と都道府県大会のみ	三〇〇	／	五〇〇	義務づけず
一般 B	国体、ブロック大会、都道府県大会のみ	三〇〇〇	一人二〇〇	五〇〇	一八〇〇
一般 A	あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は制限をうける	四〇〇〇	一人二〇〇	五〇〇	一八〇〇

ジュニア指導陣

木野、野田、本田選手が参加

ミュンヘン・オリンピック以降動きの止まっていた日本協会の男子頂点強化は荒川理事長4選による新体制の発足でにわかに活発となり、再び「世界への雄飛」をスローガンにかかげてスタートが切られた。

まず、永年の懸案であった全日本男子ジュニア（満22才以下＝本誌104号に選手名簿掲載）の強化合宿が3月4日から8日までの5日間、東京・青少年総合センターで行われることになり、その指導陣が発表された。

オリンピックコーチ（補助役員）の竹野奉昭氏をはじめ槙敏夫（下関中央工高監督）、田中秀夫（中大監督）、村中明郎（湧永薬品監督）、北川勇喜（日体大監督）、江名英彦（三景監督）、川上整司（中大附属高監督）ら若手育成に定評のある指導者が揃い、指導陣そのものの顔ぶれが新鮮なのも特色といえる。さらにナショナルプレイヤーのなかから木野実（湧永薬品）、野田清（大同製鋼）、本田洋（GK大阪イーグルス）の3選手が加えられたのは注目される。これまで日本協会は現役一流選手を技術指導面で活用することに消極的だったが、わずか5日間とはいえ、正式にコーチの肩書きをつけて木野ら3選手を呼びよせた試みに期待は大きい。

男子ナショナル、新編成へ準備急ぐ

48年度ナショナルチームについては第8回世界選手権（49年2月東ドイツ）が近づいていることから早急に編成への準備を行うことが全国理事会（2月10日）で申し合わされた。荒川理事長は「新設の強化委員会でアウトラインを固めたい」意見を示し強化委員会のスタッフ造りが3月上旬までに終わればコーチングスタッフや選手選考は4月末までにメドがつこう

女子は、すでにナショナルチーム監督として井蔦氏（大洋デパート監督）が決定、世界選手権アジア予選のコーチングスタッフ、候補選手も決まっている。48年度ナショナルプレイヤーについては、アジア予選終了後、強化委員会と井監督が話し合うことになりそう

注目される強化委の設置

新・荒川体制が打ち出した特色の一つに「強化委員会」の設置がある。

技術・普及・審判―いわゆる競技3部の統括機関として国際ハンドボール連盟（IHF）をはじめヨーロッパ各国にはテクニカル・コミッティ（TC）が置かれていることは御承知のかたも多いだろう。

どのようなハンドボールをすれば自分の国の選手が最良の成果をあげられるか――そのトレーニング、戦術の研究はもちろん、それにそった指導体系の作成、さらには男女ナショナルチーム監督の人選はすべてTCが行う。どの国もTCは直接ナショナルプレイヤーの選考は行わない。TCによって選ばれた監督がコーチを選び、そのグループが行うのである。

TCの委員長ともなればスポーツ界での位置は高く、社会主義国家になると社会的評価も相当なものだ。

荒川理事長はTCに見合う機関として強化委員会を考えており、いきなり外国のような"実力"はムリとしても将来はその線まで持っていくつもりだ。そうなれば競技面での最高執行責任者として強化委員長、運営面における執行代表として総務主事を置くという田村―荒川ラインの懸案にも近づくことになる。

ところで、2月10日の全国理事会で荒川理事長は早急にその人選を進め3月中に活動することをほのめかした。来春2月の第8回世界男子選手権が迫っており、オリンピック後、空白状態の男子ナショナルチームの編成が初仕事になることは間違いない。

スタッフは技術、普及、審判部から6名程度、外部（学識経験者）から5名程度を加えて編成されるものとみられる。有識者はフィジカル、メディカルな研究分野から人選されるといろみかたが強い。

また、ケースによって関係者を特別参加させる「拡大強化委員会」の設置も考慮されよう。

ところで、強化委員会の新設で頂点強化の基本方針が打ち出されるのは結構なことだが、このシステムの死活は、競技3部―特に現行の技術部とどう連けいし、分掌するかにかかっていると思う。

下手をすると強化委―技術部―ナショナルチームの三角関係がもつれる危険もなくはない。要はいかにナショナルチームを動き易くするかにあるのだ。委員会の慎重かつ大たんな活動とともに強化委員長を兼ねる予定の荒川理事長がどのような手腕を発揮するか、なりゆきを見守りたい。（X）

全日本総合選手権基準要項（全文）

1、趣旨 日本ハンドボール界における最高権威の選手権大会で優勝チームはその年度の「国内チャンピオンチーム」としての栄誉を得る

2、主催者 日本ハンドボール協会

3、後援者 イ、開催地関係団体(ただし教育・スポーツ団体に限る)

ロ、読売新聞社

4、主管 開催地ハンドボール協会

5、期日 毎年12月

6、会場 原則として東京都内、大阪市内、名古屋市内の体育館

7、参加チーム数 男女とも16チームを限度とする。(女子は当分の間12チームを限度とする)

8、参加資格 イ、男女とも日本協会登録チームであること

ロ、男子

a、前年度優勝チーム

b、日本協会推せんチーム(原則として前年度準優勝チーム)

c、全日本学連推せんチーム

d、全国高体連ハンドボール部推せんチーム

e、全日本実連推せんチーム

f、全日本教職員連推せんチーム

g、全日本自衛隊連推せんチーム

h、上記efg各項に示された全国連盟に所属していない一般(成年)男子チームを日本協会が選考、参加させることがある

i、開催地協会推せんチーム

ハ、女子

a、前年度優勝チーム

b、日本協会推せんチーム(原則として前年度準優勝チーム)

c、全日本学連推せんチーム

d、全国高体連ハンドボール部推せんチーム

e、全日本実連推せんチーム

f、上記e項に示された全国連盟に所属していない一般(成年)女子チームを日本協会が選考、参加させることがある

g、次年度国民体育大会開催地協会の推せんによる一般女子(注・昭和50年度からは成年女子)チーム

h、開催地協会推せんチーム

ニ、男女ともabを除く各項のチーム数の配分は日本協会全国理事会で協議し、同全国評議員会の議決を経る

ホ、男女とも定められたチーム数に辞退による欠員が生じた場合日本協会(原則として常務理事会)が改めて配分し、もっとも近い全国理事会で承認をうける

9、選手 男女とも日本協会登録者であり、参加チームの正式所属選手であること。日本協会登録者であれば国籍は問わない。

10、競技規則 その年度の日本協会競技規則

11、競技方法 イ、男女とも予選トーナメント・決勝リーグシステムとする。

ロ、予選トーナメント各試合は正規の延長を行なう

ハ、決勝リーグ各試合は延長戦を行なわず順位の決定は勝ち2点、引き分け1点、負け0点のポイントシステムとする

ニ、ポイントが同点の場合は決勝リーグの総得点から総失点を減じて総得点の多数者を上位とする

ホ、ニでも優劣がつかぬ場合は決勝リーグの総得点多数者を上位とする

ヘ、ホでも優劣がつかぬ場合は該当チーム同士の勝敗による。

ト、以上でも優劣がつかぬ場合それが優勝にかかわる時はそのまま「両者優勝」とし、順位にかかわる時は「両者順位」として処理する

12、組み合せ 日本協会の指名する役員若干名(組み合せ委員会)による厳正な抽せんによって行なう

イ、前年度優勝チームと同準優勝チームが申しこみをしている場合は予選トーナメントでの対戦をさける

ロ、男女とも推せん母体を一にするチームの予選トーナメント1回戦での対戦をさける

ハ、組み合せ委員の過半数が有力チームの分散(シードに)同意した場合は予選トーナメントでの1回戦に限りそれを行なうことができる。有力チームの指名と分散は組み合せ委員にまかされるが、その数は4チームを越えてはならない。

ニ、組み合せの決定(抽せん)は公開とする

13、審判員 日本協会が指名、A級ライセンスをもつ者とする

14、表彰 男女とも次のように表彰する。

イ、優勝チーム 日本協会からの賞状、日本協会賞、読売新聞社賞、選手権賞(優勝メダル)

ロ、準優勝チーム以下4位チームまで日本協会からの賞状

15、安全対策 主管者は参加選手が安心して競技が行なえるような設備を施し、競技中の傷害に関して充分な配慮につとめること(ドクターの常駐、保険への加入、参加者の健康保険証の携帯などにつとめること)

16、大会参加料 この大会に参加するチームから主管者は大会参加料を徴収できる。ただし、その額は日本協会の了解を得るものとする

17、その他 イ、主管者は主催者と協議の上、大会の2カ月前に「大会要項」を作成、発表しなければならない。「大会要項」には具体的な大会期日、会場名、1チームの構成数、大会参加料、組み合せ抽せん日を明記し、使用球を示すのが望ましい。

ロ、大会第1日の前日主催者と主管者によって「参加チーム代表者会議」を開かねばならない

ハ、「参加チーム代表者会議」は開会式を兼ねることができる

ニ、開催基準要項を変更する場合は日本協会全国理事会で協議、全国評議員会の承認を必要とする

ホ、主管者は参加チームと審判員のために宿舎のあっせんを行なわねばならない

ヘ、大会々長、大会委員長、競技委員長、審判員には規定の旅費宿泊費が主管者から支払われる

ト、組み合せ抽せん後、棄権したチームは日本協会懲罰委員会で審議する

チ、組み合せ委員会のメンバーは原則として日本協会常務理事会で決定する

リ、本要項(6)に定めた地域以外で本大会を開催する場合は日本協会全国評議員会と同全国理事会の承認を必要とする

ヌ、男女を分け、会場、日程を「独立」して開催する場合は日本協会全国評議員会と同全国理事会の承認を必要とする。

新路線（体協）の決定待ち

～どうなる今後の国体～

地方別の思惑からみ複雑

国民体育大会をめぐる話題がこのところ本誌をにぎわしている。すでに27年の歴史、すべてに検討を加える時期ではあるが日本ハンドボール協会はもとより、日本体協でもその改善策には頭を悩ましているようだ。どうなる国体、どうするハンドボール競技…これまでの情報をもとに中間報告しておこう。（編集部）

今後の国体構想でただ一つ決定しているのは明後年の第30回大会（三重県下）から参加者を年令別とし19才を境に成年（男女）、少年（同）の2種別4部門に分けることである。

これによってどの程度、国体の体質改善ができるか、今後への課題も少くはないが〝改革〟ではあろう。

成年をさらに年令別あるいは一般・教員に分けられるが、日本協会では昨年末、普及部中央委が成年男子を19～29才クラス、30才以上（壮年）クラスに2分する提案を行っている。これについて理事会などは人員枠が決定してから検討したいとして、棚あげの状態だ。

その人員枠もなかなか波乱含みである。体協国体委員会（委員長は日本協会の保坂周助副会長）では45年4月に各競技団体に対し第1次案を示し、ハンドボールは4部門合計960名（監督80、選手880名＝合計チーム数80）とされた。

この数字は現行の864名（監督72選手792名＝合計チーム数72）をわずかながら上廻るものだが、日本協会は1チームの算出根拠が11名（ほかに監督1）なことと、4部門のうち1部門をフルエントリー（47都道府県参加）したいとしてこの案を受け入れていない。

その後約3年間、体協（国体委）と日本協会間の調整はほとんどできていず、「全競技のうち折り合っていないのはハンドボールなど5団体だけ」（荒川理事長の話）だが、90チームをこす参加となった場合、雨天時の室内施設に不安もあり、参加人員が今後どのような線にまとまるか成り行きが注目される。

種別参加数の〝回転〟問題

本誌前号で北井晴次氏が提唱した各年度ごとに種別参加数をローテート（回転）させる案は、日本協会サイドでも再三協議され、昨秋11月の月例常務理事会では荒川理事長が「50年度以降に考慮したい」と発言している。

しかし、卒直のところ北井氏が説くような「一般への普及か、高校への認識高揚かとなれば強化の第一歩は普及であり、若い世代を掘りおこすことが優先されるべきだ」というところまで議論は到達していない。というのも体協国体委が「国体を社会体育の推進役にしたい」との姿勢を示したことがあるからで、普及部中央委も「一般社会人への解放」が基本方針だと伝えられる。

だが現実は地方体協の競技力向上―選手強化がすべて国体への道につなげられていることもあり、競技団体の多くも、一気に市民スポーツの祭典に変身することには難色を示している。

難しい？有力実業団の辞退

有力実業団を辞退させては――という声も相変らず出たりひっこんだりしている。

賛成派の代表意見は「OBやOGにとって国体は唯一の目標、実業団のために道をふさがれそれがクラブの減少につながっている」

反対派の代表意見は「実業団の活躍でポイント（天皇杯、皇后杯）があがり、県内におけるハンドボールの位置を高めさせられる」ということになる。

開催地はどちらかといえば有力選手の「来場歓迎」である。鹿児島国体（隼人町）でも「オリンピック選手を見たいと思って」会場へ来た人が圧倒的に多い。

賛成派、反対派の数はいつの会議でも五分と五分。普及部中央委は「日本リーグ発足を前提として全日本実業団選手権の男女上位8チームを国体から除きたい」と〝勇気ある発言〟をしたが、1月の常務理事会は受け入れ地側の事情もあって少くとも49年度まで現行のままとし「50年以降は大綱が決まってから決定する」と無難な結論に落ちつけている。ちなみに日本リーグ問題はいまのところまったく白紙である。

また「一般女子12を10に、同男子30を32に」や「ブロック別代表数の手なおし」論議も48、49年度は5部門とも現行どおりとすることに1月21日の全国理事会で決議した。

27年間にしみこんだそれなりの歴史、地方ごとに異る複雑な背景もからんですべては日本体協が新路線を発表してからのようだ。

〝無人の評議員会〟に議論集まる

2月11日の定期全国評議員会は、かつてないほど評議員会のありかたに熱のこもった意見がとびかい、規約の全面的検討にまで議論が及んだ。

この問題の周辺を探ってみよう。（編集部）

この日、会議に出席した評議員は代理出席者を含めて10人。大きな会議室の4分の一ほどのスペースでこじんまりとした審議。しかしいくつもの重要な案件が可決・承認されていった。

出席者は10人だが、荒川理事長のかたわらに積まれた20枚のはがきが〝無言の出席〟をしていたからである。（定数は52名）

日本協会規約第7条第4項「評議員は文書をもって他の評議員に権限を委任することができる」つまり委任状を認めていることが、この場を30人に仕立てる〝秘密〟なのだ。

初出席の関和虎評議員（福岡）はたまりかねて、会議中、杉山総務担当に小声で聞いたものだ「出席1名、委任状26枚でも会は成立するんだネ」——。

委任状の承認がマイナス？

正にそのとおり。現行規約では立派にそれで通じるのである。

誰もが疑問を抱きながら、7年余が経っている。執行部や事務局は手をかえ、品をかえ評議員に会議場へ姿を見せてくれるような〝対策〟をこうじてきた。しかし、返ってくる答えは「欠席—委任」ばかりである。

何時しか、評議員は多忙で出席・・・していただけないもの・・・といううけとりかたが生まれてしまったのもムリがないのではなかろうか。

しかし、評議員側にしてみれば「評議員会に出易い雰囲気がないのではないか」「出席しても実がない会議内容だったという反省はないか」「旅費などを出せば〝義務感〟を植えつけられるのだが」

「会議が終ったら解散というのではなく、親睦の場をつくったらどうか」——と注文は多い。そして宮川健一郎評議員（茨城）が「委任状を認めていることがかえってマイナス」と発言したのをキッカケに、日本協会規約が俎上にのせられたのである。

規約改正の機運も

評議員会は日本協会の最高議決機関である。

定数不足で成立せず流会してしまえば日本協会の活動はストップする。荒川清美理事長は「委任状に支えられている現状は健全ではない。しかし、この制度をなくして協会運営ができるだろうか」と不安をもらす。

だが関評議員は「第一の非は出て来ない評議員側にあろう。しかし、いくらなんでも27枚の委任状があれば一人の出席もなく議決できる最高議決機関などとんでもない」という。

田村正衛会長は「評議員の間から評議員会の姿勢に意見が出て、委任状廃止の声が支配的なのは願ってもないことだ。日本協会規約の全面的検討をしてもいい」としたが杉山総務担当は「規約そのものに欠陥があるとは思えない。ただ、委任状が認められるならそれで済ますというムードがあるようなら第7条第4項だけをとりはずしたら…」と全面改正には消極的だ。

濃厚な〝ころも〟替え

日本協会運営面で評議員会の占める比重が大きすぎるという声も多かった。具体的には宮川評議員が「評議員会の権限を大幅に理事会ないしは常務理事会に移行し、予算、規約の改訂など最小限度の承認事項に縮小したら」と提案した。こうした意見が評議員の間から出たのは注目されよう。

結局、田村会長が「規約の検討とともに評議員が出易い方向へもっていきたい」とする発言をまとめとして〝評議員による評議員会論〟は一応おさまったが、代議員制度、ブロック評議員制度など新しい構想が述べられたことなど近い将来評議員会のころも替えが行われそうな気配である。

「日本協会はこのところめっきり充実して来たと思う。しかし、真の発展を遂げたと胸をはれるのは、評議員会が一枚の委任状もなく成立するようになった時ではなかろうか」（徳永陸案副会長）——名言であろう。

現行規約施行後の評議員会
（◎印は定期会議）

開催日	場所	定員	出席	委任状	成否	欠席
◎42年2月26日	（東京）	49	9	29	成立	11
10月23日	（浦和）	50	（不	明）	成立	15
◎43年2月18日	（東京）	50	9	18	成立	23
10月4日	（福井）	50			流会	
◎44年2月16日	（東京）	50	8	22	成立	20
10月27日	（長崎）	51	23	7	成立	21
◎45年2月1日	（東京）	51	9	25	成立	17
10月11日	（盛岡）	51	23	12	成立	16
◎46年3月7日	（東京）	51	6	23	成立	22
10月3日	（東京）	52	4	22	成立	26
◎47年2月12日	（東京）	52	10	22	成立	20
6月11日	（東京）	52	4	25	成立	23
48年1月20日	（東京）	52	4	25	成立	23
◎2月11日	（東京）	52	10	20	成立	22

ラインハウゼン（西ドイツ女子）来日か

日本協会全国理事会（2月10日・東京）は、かねてからその受け入れについて協議を進めていた西ドイツの女子クラブ「ラインハウゼン」の招待を、なお検討し続けることに決めた。

同クラブは今秋9月の来日を再三にわたつて強く要望、しかし、日本側は受け入れを希望する組織やチームが予定の試合に満たぬため、難色を示していたが、来日期間を短かくし、関東周辺と熊本でそれぞれ単独チームが計4試合を行う方向で再検討することにした。

メーリンゲン来日希望　西ドイツ全国リーグ南地区の強豪SV・メーリンゲンクラブは近く日本遠征を行いたい旨、日本通運航空を通じ日本協会へ連絡してきた。

日本協会の態度をふくめ一切未定である。

また昨年来、再三にわたって来日を希望しているデンマークのトップクラブ、スタディオンコペンハーゲン（男子）も今秋9月末から10月にかけての日本遠征を申し入れてきている。

自衛隊チームの特別扱い期間を延長……日本協会

本誌前号既報のとおり、日本協会は1月21日の全国評議員会、同理事会で自衛隊チームの日本協会登録特別取り扱い期限をさらに2年間延長し、昭和49年度までとすることに決めた。

日本協会では44年度から4年間にわたつて自衛隊球界の拡充を企るため特別措置を採っていたが、軌道にのってはきたもののなお普及、レベルアップのためには全面的な支援が必要と判断した。

【自衛隊チームの日本協会登録特別取り扱いについて】

一、自衛隊チームの実連系大会（全国・地方を問わず）への出場を認める。

二、全日本自衛隊選手権（男子）への出場は日本協会登録チームを原則とする。但し同選手権は毎年5月開催のため日本協会登録予定チームの出場も認める。（同選手権出場チームはその年度日本協会登録を行うよう全日本自衛隊連盟が指導する）

三、日本協会登録チーム名以外での活動を認める。

四、全日本自衛隊選手権へ同一ベース（例えば司令管区、基地）から複数出場を認める。

五、全日本自衛隊選手権女子の部は当分の間公式全国大会とせず日本協会未登録チームの出場を認める。

（注）国体に関しては一切の特例を認めない。

宮永劭・全日本自衛隊連盟理事長の話　日本協会登録に関しては8割以上一般なみにできた。問題は〝自衛隊〟という特別な環境にあるため他分野と全く同じ制限をうけると活動できなくなってしまうことだ。特別措置の延長は大変ありがたい。

「スポーツ安全協会傷害保険」の受けつけ

財団法人・スポーツ安全協会は45年度の「スポーツ安全協会傷害保険」の加入手続きを3月1日から開始する。

この保険は48年4月1日から1年間有効で、ハンドボール競技者は「第2種のC」を適用。

「第2種のC」は保険金額一口五十万円（このほか1ケガ日当りの医療保険年金五百円）で保険料は一人四百四十五円。個人では加入できないが1チーム10名以上の構成（団体）なら誰でもよい。

全日本総合組み合せ問題で荒川理事長が発言　本誌前号に田中滋章氏（前・全日本実連理事長）が投稿した「全日本総合・大学偏重組み合せに一言」について日本協会荒川清美理事長は編集部を通じ次のような発言を行った。

『第24回全日本総合選手権の組み合せで大学チームが「上位へほぼ間違いなく進出できるように組み合わされ……」という田中氏の発言は遺憾だ。同選手権の組み合せは10月15日の全国理事会で指名された5人の組み合せ委員と主管の東京都協会2人の計7委員によって抽せんで行われたもので作為的な点は一つもない。有力チームの分散（シード）も、今年から施行される全日本総合選手権開催基準要項～本誌8頁参照～にのっとったものである。この大会の目的はチャンピオンチームを決めることにあり予選ラウンドの一試合々々さえ〝決勝〟ともいうべきノックアウト・システムだ。2位以下の順位にさしたる意味はないし、まして実業団と大学との実力比較だけを考えて運営することはできない。』

平仲孝栄氏を表彰　日本協会は昭和42年以来3期（6年）にわたり日本協会沖縄選出理事として活躍された平仲孝栄氏（沖縄県協会理事長）を5月の沖縄特別国体時に特別表彰することを決めた。

思い切った「入替え制」を

学生界のレベルダウンがささやかれている。これはハンドボール界に限ったことではないらしいが、やはり学生スポーツが盛んでないとそのスポーツの発展が日本では難しいと思う。

私もたまに駒沢のリーグ戦を視くが、必しも水準低下とは思わぬが、時にはこれが一部かと疑いたくなる内容の試合もある。

全体の充実感を満たすために一部8校を6校に縮少するとか入れ替え戦の大巾な改訂を行うとかする方法を考える時期には来ているようだ。

特にBクラスの試合のつまらなさを救うためには現行のような入れ替え戦ではなく、思い切って1部7、8位校と2部1、2位校を自動的に入れ替えてしまってはどうか。

本誌で知ったことだが関西学生リーグは2校ずつによる入れ替え戦を行っているようだし、実業団の上位大会と下位大会も2チームの自動的交替が採用されていると聞く。

関東学生をはじめ各地学生が新しい力の進出に上位への門戸を大きく開くよう期待する。それが旧勢力の発奮につながればこの上ない。【東京・楠　重明】

読者投書欄　明日への提言

陣容一新の実業団連盟

教職員連会長に山田氏

加盟団体新人事決まる

全日本実連　1月28日名古屋で全国理事会を開き48年度の役員を改選、執行部は厚味のある若さにあふれた陣容となり、理事長、日本協会派遣役員も一新するという思い切った人事をみせ前理事長田中滋章氏（タヨシ産業）は顧問となった。

▽会長　林達夫（大同製鋼副社長）▽副会長　渡辺和美（大崎電気）平出一（日進商会）▽理事長　泉正明（日本発条企画本部）▽副理事長　岡部正文（日本鋼管）＝財務担当　山田稔（大山商会）、横地宇吉（ブラザー工業）＝国際担当村中明朗（湧永薬品）▽常務理事富永功（陸上自衛隊）近藤金博（東京重機）＝審判担当　近藤信行（大崎電気）＝技術担当　福本弘（大崎電気）＝普及担当　芦川勝英（日本発条）＝庶務担当　西村亮治（大同製鋼）＝広報担当

▽理事　松岡富夫（本田技研）＝技術担当、竹野幸昭（大崎電気）、池田鉄哉（日本ビクター）、田中登司治（京都信用金庫）、井蕉（大洋デパート）、河原春充（三景）、横野貴彦（富士レジン）、川岡成徳（日新製鋼）、中浜大輔（大同製鋼）、村田幸雄（日進商会）、田口侑義（東北ムネカタ）、西本利治（武田薬品光）▽日本協会派遣役員　横地宇吉、泉正明

理事長に片瀬氏新任

全日本教職員連　1月21日静岡県で役員会を開き、創立以来空席のままだった会長のポストに山田計理事長（大阪）を推し、理事長には片瀬喜代次氏（静岡）を新任した。

山田氏の昇格にもなう日本協会派遣役員（2名）については、片瀬理事長のほか、当分の間山田会長の代行を日本協会に届出ることになった。これは日本協会規約が「加盟団体の会長は評議員」としているためである。

最高首脳陣は留任

全国高体連ハンドボール部　2月9日東京で全国委員会を開き、部長に徳永陸繁氏を再選、副部長も清水正（東地区）、嶋田新太郎（中地区）、小袋是郎（西地区）の3氏が留任した。常任委員は今年度から沖縄県の九州組み入れで13名（ブロック9、部長推せん4）となるが、名簿の発表は後日まとめて行われる。

日本協会へ藤松理事

全日本学連　2月4日東京で全国総合役員会を開き、新役員の改選を行った。その結果、会長に西敬郎氏（慶大出、関東学連会長）を四選、理事長は中沢重夫氏（芝浦工大出、関東）の再任となった。また、日本協会派遣役員として中沢理事長のほか藤松博氏（名工大出、東海）が推された。東海学連系理事が日本協会へ送りこまれるのは初めて。このほか、委員長（学生）には岡田修君（中大、関東）が決まった。

また、今年の日韓交流は男女とも全日本学生選抜を編成して遠征することを申し合わせた。

四国協会々長に梶浦氏

四国協会は1月28日徳島県池田市で四国4県理事長会を開き、次のように新人事を決め発表した。

▽会長　梶浦障一（愛媛）▽副会長　森住雄（香川）、立川利雄（徳島）、邑田一郎（高知）、高橋満年（愛媛）▽理事長　越智武（愛媛）▽常任理事　辻要（香川）、川崎秀雄（高知）、田岡忠（徳島）▽理事　石原達夫、楠原敵明（以上香川）河本武夫（愛媛）、鶴岡久雄（高知）、前田誠之助（徳島）

名古屋で二つの実業団大会

女子、東京重機も参加

愛知県実業団連盟などはこのほど3月名古屋で行われる二つの選抜大会の日程を次のように発表した。男子の「第3回ビッグフォア」は4強のいわゆる定期戦、一昨年は大崎電気、昨年は大同製鋼が優勝している。女子の「NBN（名古屋テレビ）杯」は東海のブラザー工業（愛知）、田村紡（三重）に全日本チャンピオンの東京重機（東京）、日本ビクター（茨城）がゲストチームとして加わるもので、男女ともナショナルプレイヤーを中心とした各チームだけにシーズン掉尾を飾るビッグエベントとしてファンの注目を集めている。

【第3回実業団ビッグフォアリーグ】▽第1日（3月10日・14時）大同製鋼×湧永薬品、大崎電気×三景▽第2日（11日・10時）大同×三景、湧永×大崎、三景×湧永大崎×大同。会場は愛知県体育館

【NBN杯争奪全日本女子実業団選抜大会（トーナメント）】▽第1日（3月16日・14時30分）①田村紡×東京重機、②ブラザー工業×日本ビクター▽第2日（17日・13時30分）3位決定戦、決勝。会場は名古屋市体育館。

「クラブの基準」施行へ

日本協会は懸案の「クラブの基準」について昨秋来、全国理事会、月例常務理事会で検討を重ねた結果、既報のとおり1月21日の全国評議員会、同理事会で可決、48年4月1日から施行することになった。

クラブの基準（全文）

【前文】クラブ（Club）とは元来「趣味などを同じくする集り」であり大学ハンドボール部も企業ハンドボール部も高校ハンドボール部も総てクラブである。ここに設けた「クラブの基準」はいわゆるOB、OGによる〝ハンドボール集団〟を対象とするもので日本ハンドボール協会の主催または共催する大会のみに適用、ブロックレベルで行われる大会でも適用されることが望ましい。なお、この規定は国民体育大会一般男子、同女子（昭和50年度からは成年男女）部門の参加規程とはなんら関係はない。

規定1、日本ハンドボール協会でいう「クラブ」とは成年男子、成年女子によるハンドボールチームを指し、日本ハンドボール協会の加盟団体たる全日本学生ハンドボール連盟、全日本実業団ハンドボール連盟、全日本教職員ハンドボール連盟、全日本自衛隊ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されていないことを条件とする

規定2、クラブ間の条件をつとめて同レベルに揃えるため次の各項に該当する選手は出場できない

イ、全日本学生ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されている学生

ロ、全日本実業団ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されている選手

ハ、全日本教職員ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されている教職員

ニ、全日本自衛隊ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されている自衛隊関係者

規定3、全日本学生ハンドボール連盟及びその下部組織に登録されていない大学のクラブでも通学先を一つにする選手が4名以上含まれているクラブ

規定4、クラブ名に商品名（略称を含む）を冠せてはならない

規定5、規定2及び規定3に該当しない学生及び留年などのためすでに全日本学生ハンドボール連盟及びその下部組織における出場資格を失った学生は日本ハンドボール協会の関連するクラブ大会に出場が認められる

規定6、規定2及び規定3に該当にしても、そのクラブの構成者（選手）全員が男子満40才以上、女子満25才以上である場合は日本ハンドボール協会の関連するクラブ大会に出場が認められる。但しチーム名は規定4を守らねばならない

規定7、規定2及び規定3に該当しても満40才以上の男子、満25才以上の女子は日本ハンドボール協会の関連するクラブ大会に出場することができる

規定8、日本ハンドボール協会の関連するクラブ大会を前にしてこの共準の禁止事項から脱け出し、正当な資格を意識的に得たとみられるクラブまたは選手は出場を停止される

規定9、クラブの役員についてはアマチュアであれば、他の条件は一切規定しない。但し、その役員が選手を兼ねて活動する場合はこの基準の適用を受ける。

補則1、この基準は昭和48年4月1日から適用する

補則2、日本ハンドボール協会の関連するクラブ大会に出場するチームはこの基準の適用を受けるとともに日本ハンドボール協会の正式登録チームでなければならない。　（了）

＜クラブ間の均等化へ＞

「クラブ」の〝定型〟化は日本協会のかかえていた大きな課題でようやく一つの線にまとめあげたものである。実業団チームの進出と充実はこれまで社会人球界の主流であったOB、OGによるクラブの意欲をうすらさせていたが、週休2日制の実施や市民スポーツ・ムードにのり復活の兆がある。

しかし、実業団や教職員などと肩を並べるには条件差が大きく、クラブだけの大会が新しい活動の中心となり、特に3年前、日本協会がブロック単位のクラブ大会促進を打ち出したことで、「クラブとはなにか」「クラブの性格づけを」などの要望が高まり、「基準」の制定となったものだ。

月1回程度しかメンバーの集らぬチームに成文化した規定は不要という声、都道府県単位のクラブ大会はクラブ側の良識の線による構成でこれまでとおり競技するといった意見、大学同好会をしめ出す一方で実連未加盟の企業チームをクラブとしてうけいれることに批判も聞かれるが、大方はクラブ間の均等・公平度が増すという点で歓迎しており県外交流時でのトラブルも少くなろう。

なお、日本協会総務企画部ではこの基準と国体とはまったく無関係なことを強調している。（S）

新しい流れへの提案①

使用球は今のままでよいのか？

光島磯雄
（大阪・投稿）

盲点をアタックせよ!!

昨年は日本ハンドボールにとってまことにあわただしい年であった。そのあわただしさも興奮も9月11日以後おわりをつげ、今や冷静な思考を基として今後のあるべき姿を追求すべきときが来たのである。

私は昨年7月末から約3ケ月にわたってドイツを中心に各地を見学して本場のハンドボールに接する機会を得ることが出来たが、オリンピックやブンデスリガ（ドイツ国内の最高リーグ戦）における欧州諸国の「力の激突場面の連続」という傾向のハンドボールを見て、今後の日本ハンドボールの将来に資するものがあればと思い、左に一風変った提案をのべることにする。今や従来の慣習の踏襲をその改良のみでは、絶対に世界の10位以内を目指すことも不可能であるし、国内においても相変らずマイナースポーツの域を脱することは期待出来ないという見地から、一見突飛かつ奇想と思われることであるが各位のお目に留めていただき、検討をおねがいしたいと考えている。

指導普及の盲点はないか！

いかにしてハンドボールを万人に愛好されるスポーツたらしめんかという古くてなお新しい命題は協会創立以来の悲願である。わかり切ったことをと笑われる向きもあろうかと思うが、オリンピック初参加という第一目的を達成した今日においては、当然それを土台としての「今後のあり方」に検討のメスが加えられなければならないのであるから、「底辺の拡大」についての方策研究が最も重要となるのである。

前置きが長くなったが、現行の国際ハンドボール連盟の「競技規則」の中に日本ハンドボールの発展にマイナス的な要素はないか、又従来の慣習の中にはあたかも「服に身体を無理に合わせよう」という傾向はなかったか、何が何んでも西欧国なみにという足もとの弱い背伸びをしすぎていなかったかと考えた上で話を進める。

あのような20×40のせまいコートで180センチ以上の巨漢が力と力の激突を行なうゲームにおいては、戦術よりも体格、体力、持久力などの基礎的身体条件が優先する状態であり、とても日本的体格による戦術や戦法がそれに対抗して互格に勝負を争うという沙汰ではない事実を明らかに知った今日において、普及指導の面に思い切った改革が絶対に必要である。確かに体格筋力のすぐれた人材の発掘は大切であり、常に追求されなければならない。しかし普及の根本は、ピラミッドの頂点からはじまるものでなく、いかにしてハンドボールを魅力ある『おもしろいもの』にするかという『原点』に立ちかえつて考えるとき、体格や筋力や根性以外に、他の観点によるものの見方にも意義があるのだ。毎回毎度世界の舞台をふんで来た人々は異口同音に言った。いわく「大きい人材を集めよ」「握力を増すようにせよ」「日本的プレーの開発」うんぬんは今なお耳に新しい。さあここで一つの奇抜かつ突飛な提案を出そう。

それは男子用ボール（3号ボール）の使用を廃止又は中止することである。中止の方法はいろいろ考えられるが、国際試合以外はすべて新規格にすることがのぞましい。理由は簡単である。

ハンドボールをはじめて手にする者にとっても、又トレーナーにとってもボールを片手でつかめるかどうかは大きい問題である。特に練習を重ねずとも最初からボールをつかんで操作する能力を引き出し、その延長技術を今より早い時期に体得させるようにするには、3号ボール2号ボールともに大きすぎると思われてならない。近来「ラテラルパス」などという耳新しい言葉による技術が、手の大きい者、又は松脂の助けを借りた上で行われているが、これとてもまだまだ一般的なものとはなり

得ない。いわんやフェントやシュートの技術においても同様である。学校につとめている方々はすでに御承知のことと思うが、校内大会で生徒がハンドボールをやるとき、あるいは授業でハンドボールをするとき、生徒らは我勝ちに争ってまずつかみやすいボール、すなわち小さいボールを手にしたがるものである。しかも短時間の指導により予想以上の技術をもしろうとの生徒が嬉々として行なうことが多いという事実からしても、底辺拡大のヒントは無造作にころがっていることに気付くのである。普通の高校生ならば少しの指導と助言で「倒れ込み」「とびこみ」「スカイプレー」その他の高等技術の真似事をすぐにやれるようになることは、明らかにボールの大きさに関係が深いと言っても過言ではない。

　ボールを片手で完全につかめることが誰にでも出来るとなれば、ゲーム内容にもおのずから新しい様相が現れるものである。キャッチミスパスミスの減少、シュートコントロールの増大、攻防転移の急速化など、あたかも百米走で言えば今まで13秒台しかみられなかったものが一挙に11秒台になるようなものである。ナショナルチームや国際試合に出るチームは、それ相当のトレーニングを積んでいるから松脂の使用もあいまってあまり問題はないであろう。日韓高校のレベルならば双方の話し合いも可能であろう。ねらいは『普及』である。

　体格や握力などというものはそう簡単に強化されうる性質のものではない。又それ以外の、指の長さ、手の幅の大きさ、その拡大長などにしてもおよそ生れつきのものである。とにかく中学、高校はそれぞれ現在の日本ハンドボールの第一歩をしるすところであるが「三年間づつしか、時間がないのだ」。

　欧州でやっていないからとか、国際試合の時に困るからなどというなかれ、現在の青少年プレヤーのうちで、はたして何人が現規格のボールを片手で自由自在に振りまわすこと可能かと問われれば返答に窮する現実と、「ハンドボールは見るのは良いがやるのはにが手」という感をもつ人が少からずあるのを何とかしなければならないのである。

　又、小学校などで行われているボールゲーム型式の種目、たとえばドッジボールなどにいくらかなりともハンドボールの要素を加味することも考えて、幼少のうちから「動機づけ」「興味づけ」をはかり、十年後二十年後の花の蕾をも培養すべきである。

　次に問題にしたいのは、「競技時間」のことである。これも日本的ルールを特に創造するという発想からすればどうにでも改めることが可能である。すなわち、ピリオッド制、クォーター制などである。ゲームの後半になると持久力、瞬発力が目にみえて衰えるということが、日本チームの欠点としてミュンヘンオリンピックの反省の一つとなっていることも周知のことであるが、これに関して「ハーフタイム」制からの脱却が効を奏するか否かは興味ある研究課題になりうると思う。12分×4ならば、高校女子にもそう過重ではなくなってくるわけである。ボールの規格変更の件はメーカー側の都合もあろうし準備期間がなければなるまいが、「時間」の方は協会独自の方針で研究可能なことである。

　ピラミッドの頂点がナショナルチームとすれば、その底辺はあくまでも広さが絶対条件である。そして現在の日本では、競技人口の増加策は「おもしろさ」を増すプレーの追求から生じるのである。私にはむづかしいことは言えない。ただ日本ハンドボールの再建は、体格や握力の増大や、国際交流、海外遠征を数多くやるだけでは駄目なのである。日本的技術の練磨と口に言うのはやさしいが、底辺のせまさが改善の方向に進まぬ以上、何回国際試合をしようと、世界大会に出場しようと、余程の幸運でもない限り10位以内に達することは夢にすぎぬことを断言してはばからない。

　いかに突飛な、奇抜な案であろうと、これによって得るところと失うところの利害計算は決してむづかしいことではないと信ずる。

　昨年の9月11日、ミュンヘンのスポーツハーレにおけるユーゴ対チェッコの決勝戦を見ながらこう思った、「この大歓声、この大興奮、そして表彰式、この日が日本チームのために来ることははたして可能か、見果てぬ夢か」と。ただしこの言葉は私のものではない、一九六一年日本ハンドボール最初の欧州遠征チームメンバーであった深江幸次郎選手(関学OB)の率直な感想をここに借用させてもらって稿を終ることとする。

　此の稿をおえた直後2月6日夜11時のNHKニュースで、サッカー協会がミニサッカーなる新しいプランを発表したことを知った。今後体育館使用などの面でもややこしいことになる。全国にあるハンドボールのゴールはあるじが交替することになりはせぬか？。正に軒を貸して母屋をとられることになりかねないと焦眉の思いである。ボヤボヤしてはならない。

（編集部注・光島氏からこの原稿が寄せられたのは2月3日。一週後同氏は日本協会会長推せん理事となった）

新しい流れへの提案②

日本リーグ実現へとびだそう

杉山　茂
（NHK運動部・日本協会理事）

日本ハンドボールリーグ——思い出したように口の葉にのり、そして立ち消える。

しかし、斯界の新しい流れとして今こそこの企画の実現にとび出す時期ではなかろうか。

これまではどちらかといえば現有勢力分布から消極論を通して来た私だが、ここに男子に限ってその提案を述べたい。

▽

昭和35年7月の話である。駒沢（アウトドア）で行われた第3回全日本学生選手権取材の帰途、当時の理事長高嶋冽氏とM紙のA記者N紙のS記者の4人でよもやま話に花が咲き「インカレのベスト8だけでリーグ戦をしたら面白いだろう」ということになった。

この年のベスト8の内訳は関東5、関西3校で、実現されればたしかにスケールの大きい面白い試みだろうと話がはずんだ。

「全日本学生リーグですね」「東京、大阪転戦というのはどう?」「プロ野球みたいだナ」「経費が大変だろう。」——たしかこんな会話がつづいたハズだ。

当時は学生全盛だった。1ケ月後の35年8月、新登場の実業団・大崎電気が全日本総合（第12回、大曲市）で準優勝したが、学生界の上位はイコール日本のトップクラスであるとして誰もが疑わなかった時代だ。

しかしそれきり夏の夜の夢にも似た〝日本リーグ〟の話は忘れられた。もち論、M紙もA紙も記事にしなかった。

ただ高嶋氏だけはこの〝夢〟をいつか実現させようとしていたのである。

これまでにも企画が……

昭和37年あたりから実業団の進出がみえはじめた。特にこの傾向は女子に著しかった。37年8月の全日本総合（第14回、徳山市）は愛知紡績（愛知、廃部）が6連覇を遂げるとともにベスト8のうち実業団が5つを占めた。38年、39年〜東京オリンピックの年〜と時が進み、女子は完全に実業団上位、男子も学生×社会人の様相を示しはじめていた。

サッカーが「日本リーグ」発足を発表したのはそのような時であった。このニュースを聞きながら私は35年7月のことを思い出した。

あの時に比べ東海道新幹線も通り日本は〝せまく〟なっている。バレーボールがつづいた。バスケットボールも研究中だといった声の聞かれるなかで、40年秋高嶋氏が日本女子ハンドボールリーグの結成について有力実業団に打診したという報せを耳にした。一部の新聞が書きたて本誌29号にもそんな記事が載ったりもした。

しかし、いつのまにやら立ち消えとなり43年8月、全日本実連を中心にアンケートがとられたり、小委員会によって日本協会へ答申書が出されたりする小さな動きはあったが、どれも〝形〟にならずハンドボール界は日本リーグについて、関心を示さなくなった。

実施への下地は充分

私はいま、改めて新しいハンドボール界のために日本リーグの発足を提唱したいと思う。いくつも理由があるがなかでも次の5点が大きい。

① 頂点強化、競技普及に絶好
② 日本協会の事業がマンネリ化していること
③ 強力チームが多数化してきたこと
④ 地方へのビッグカード進出（地方協会の組織強化）
⑤ マスコミへの話題提供
⑥ よい意味でのスタープレイヤーの輩出

これだけの利点がありながらこれまで実現へ踏み切りをためらっていたのは③及び④に不安があったからだ。

今や、各種大会の優勝争いをズバリ予想することは至難といわれるほど群雄割拠、決勝リーグ制を布けば必ずドロー（引き分け）の試合がみられる。また、地方協会の充実にも目を見はらされるものが

原稿募集・新しい流れへの提案

日本ハンドボール界に新しい流れを、という声が内外から高くおこっています。

そこで本誌では広く読者の皆さんから、新鮮で独創的な提案をつのることとしました。次の要領でふるって御投稿下さい。なお、今回は日本協会役員の寄稿も受けつけます

▽テーマ　日本ハンドボール界への建設的な提言
▽字数　二千字以上四千字以内
▽用紙　原稿用紙（タテ書き）
▽〆切り
・第1次　3月17日（＝本誌4月号に掲載予定）
・第2次　4月10日（＝本誌5月号に掲載予定）
▽原稿の末尾に住所 氏名（筆名も可）、年令、職業を明記のこと。
▽あて先　東京都渋谷区神南1の1の1 日本ハンドボール協会編集部（郵便番号 一六〇）
▽提出された原稿は返却しません

日本ハンドボール協会編集部

ある。「大規模な全国大会はムリだが、単発的なビッグカードならいつでも――」と声をかけてくれる協会は十指にあまる。日本リーグの下地は充分に整えられていると判断したい。しかもオリンピックの実施で「ハンドボール」が知れ亘ってきたことも大きい。

他競技にない特色を

だが、今、日本のスポーツ界には七つの日本リーグがある（注・サッカー、バレーボール、バスケット、アイスホッケー、女子ソフトボール、社会人アメリカンフットボール、学生ゴルフ）。

ハンドボールは二番煎じどころではない。これら〝先輩〟リーグにない内容・特色を備えて登場しなければならぬ。

それは、次の二点である。

① 実業団に限らず学生、一般、教職員チームも含めた文字どおり日本の8強で構成、リーグ優勝者をその年度のチャンピオンチームとすること

② 同時に2部リーグ、3部リーグ、あるいはリジョナル（地方＝いわゆるブロック）リーグも発足させること。

①は必須条件だ。実業団を除く他分野が日本リーグで活動することは容易ではなかろう。事実、これまでハンドボール界に日本リーグが生まれにくかったのは、他の競技よりも実業団―学生・一般・教職員の差が決定的でなかったことがあげられよう。

**日本ハンドボールリーグ
スケジュールのサンプル**

第1週 第1日	三景―日体大	（東京）
	大崎電気―中大	（〃）
	大阪イーグルス―本田技研	（大阪）
	湧永薬品―大同製鋼	（〃）
第1週 第2日	三景―中大	（東京）
	大崎電気―日体大	（〃）
	イーグルス―大同製鋼	（大阪）
	湧永薬品―本田技研	（〃）
第2週 第1日	中大―日体大	（横浜）
	三景―湧永薬品	（〃）
	大同製鋼―本田技研	（名古屋）
	イーグルス―大崎電気	（神戸）
第2週 第2日	中大―湧永薬品	（千葉）
第3週	中大―大同製鋼	（東京）
	大崎電気―三景	（〃）
第4週 第1日	日体大―本田技研	（宇都宮）
	イーグルス―三景	（京都）
第4週 第2日	中大―本田技研	（水戸）
	日体大―大同製鋼	（前橋）
第5週 第1日	大同製鋼―三景	（四日市）
	本田技研―大崎電気	（〃）
第5週 第2日	湧永薬品―イーグルス	（大阪）
	本田技研―三景	（四日市）
	大同製鋼―大崎電気	（名古屋）
第6週 第1日	中大―イーグルス	（東京）
	日体大―湧永薬品	（〃）
第6週 第2日	日体大―イーグルス	（東京）
	大崎電気―湧永薬品	（〃）

実業団だけで「日本」リーグを行いたい、といった声を聞かぬでもなかったが、私はいつも「全国実業団リーグ」でガマンできぬかと云い、実連関係者の顔をくもらせて来たモノだ。

日本ハンドボールリーグをスタートさせるからには、どうしても実業団以外のチームの参加が必要である。言葉を替えれば全日本総合選手権の発展的解消だ。時の流れはやがてベスト8＝日本リーグ＝から学生や、教職員が姿を消さざるを得なくもなろうが、現時点では、実業団オンリーでリーグを組むことはできまい。

他競技の日本リーグが実業団で独占されているのは、他の分野のチームが「長期リーグにつきあえぬ」物理的、経済的理由からだ。この面をハンドボールは考えれば、大きな特色を打ち出せるのだ。

例えば、日本リーグ運営の基盤はホームコート制（本拠地制）である。8チーム参加の場合全7試合が4対3の比率でホームゲームと遠征ゲームになるわけだが、学生や一般、教職員には極力、遠征（乗りこみ）をはずすようなスケジュール編成をする。日本リーグ推進論者の多い実業団関係者の〝理解〟があればこれは解決されると思う。

昨冬12月の全日本総合選手権のベスト8で1回総当りの日本リーグを発足させた場合のスケジュールを作ってみよう（別表）。会場地は筆者の勝手の判断なことをお許し願いたい。将来は2回総当りのホームアンドアウェイである。

費用は独立採算制で

リーグ発足と決まれば使用球の統一、審判団の編成、公式記録委員会の発足など細かいとりきめが必要になってくるが、何よりも肝心なのは経費だ。

いっさい独立採算制としてみたらどうか。統一された入場料による収入はプールされ、その他にプログラム広告料、テレビ放送権料など一切を合計。リーグ後まず10%を日本協会、15%を開催地協会、あとの75%は参加8チームに環元するのだ。

各チームとも、はじめ二～三年は遠征費など持ち出しになろう。

女子についてもふれておこう。いち早く実業団優勢となり一時は「5強時代」などといわれた華やかな時もあって、むしろハンドボールで日本リーグを行うのは男子よりも女子と云われたものだ。ところがオリンピックムードにあおられてしまってその立ち場が逆転、どいうのが現状だ。各上位戦のメンバーが固定化しているせいもあって、日本リーグ発足を唱えてももう一つ新鮮味が感じられないのも弱い。まず、男子をスタートさせ、日本リーグという事業そのものへの理解を全国のファンに植えつけてから女子が登場して来ても遅くはなかろう。ヨーロッパ諸国の全国リーグを見ても、男子が先に発足しており、西ドイツなど未だに女子はリーグを組んでいない。

ヨーロッパ杯の勝者と対戦

ここからはフイクションである別表の日程によって第1回日本ハンドボールリーグは上々の人気のうちに行われ、湧永薬品が栄冠を握った。

ひきつづき湧永薬品はソウルで開かれたアジア各国のチャンピオンチームによる第1回アジアカップでも好調に勝ち進み、決勝でニューデリー・エレファンツ（インド）を破り初のアジアの王者となった。

陽春4月、ヨーロッパカップの勝者ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）と単独チームの世界一を大阪市立中央体育館で競う。木野×グルイアのキャッチフレーズ、入場券の問合せで日本協会の電話は先ほどから鳴りっ放しだ。

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

アフリカ競技大会の種目に

男女の世界選手権が迫って来ている。一シーズンの間に二つの世界選手権（女子＝48年12月、男子＝49年2月）が行われるのは史上初めてであり、ヨーロッパ球界の動きはにわかに活発になって来た。

充実いちぢるしいアフリカ地域の活動にも目を見はらされるものがあり、1月ナイジェリアのラゴスで行われた第2回アフリカ競技大会に初めてハンドボールが参加した。8年前の第1回大会（コンゴ）の時は不参加だったが今回は8ケ国が出場アルジェリアがエジプトを14－12で破り優勝した。アルジェリアは地区予選でオリンピック出場のチュニジアを15－15、13－8のスコアで制している。オラン（アルジェリア）で行われた第2戦は一万のファンを動員したという。

アメリカ大陸ではアメリカの著しい進境があり、大陸（地域）別ではアジアが完全に立ち遅れてしまったようだ。なお、アジアの新しい仲間インド（ＩＨＦ未加盟国）は近く2回目の国内選手権を開く。

シュミットのカムバック

ニュースというには少々古いが西ドイツナショナルチームにハンス・シュミット（グンメルスバッハ、46年4月来日）が復帰、スイスとの2試合で9点を叩きだし健在ぶりを示した。

前監督ヴイック氏の構想に反撥して、ミュンヘンオリンピック代表からもはずされ、地方クラブのコーチになるなどといった噂も囲いたがミュンヘン後、ヴイック氏からケスラー氏に監督のバトンが渡るや、とたんに呼び戻された。

このあたりヨーロッパのナショナルチームの〝性格〟がよく現れていて興味深いと思う。

監督の意向は絶対であり、たとえシュミットのような国際的なゲッターでも反目しあうとはずしてしまう。もちろん協会（本部）は監督の考えを支持し、世論との防波堤をつとめる。

選手側ももちろん強気だ。かってのナショナルチーム主将ムンク（GWダンケルセン、47年4月来日）に云わせると『僕もシュミットもこちらから辞めたんだ』ということになる。

協会・監督と選手のやりとりにマスコミが一役買いファンの間で論議が昂まる。

どれもこれも、西ドイツにおけるハンドボールの人気を示す話だが、協会そのものの考え方が日本などと比べものにならぬほど大きいことを痛感する。

一億七千万円を売り上げ
オリンピック入場券

ミュンヘンオリンピック組織委員会（ＭＯＯＣ）は、このほどミュンヘン大会の入場券売り上げの結果を発表した。

それによるとハンドボール競技は全8日間を通算して91％の入場券を売り捌き、約百七十七万ドイツマルク（邦貨約一億七千万円）の売りあげを記録した。これは21競技中7位（注・1位は陸上競技）にあたり、ボールゲームではサッカー（2位）についで第2位。予選リーグ（3日間、24試合）をミュンヘンで行えば、さらに数字は伸びただろうと云われる。

東ドイツが上位占める
～シュエリン国際～

東ドイツのビッグトーナメントシュエリン国際大会は東欧勢5ケ国6チームによって行われ、地元東ドイツのA、Bチームが1、2位を占めた。ミュンヘン後、若手に切り替えた東ドイツの強さは注目に価しよう。

東ドイツ	22	12－7	10－6	13	B東ドイツ	
ハンガリー	15	5－6	10－8	14	ソビエト	
東ドイツ	19	11－6	8－7	13	ハンガリー	
B東ドイツ	20	9－4	11－14	18	ブルガリア	
ソビエト	26	14－11	12－7	18	ブルガリア	
ハンガリー	16	6－7	10－9	16	B東ドイツ	引き分け
東ドイツ	25	11－8	14－4	12	ブルガリア	
B東ドイツ	17	8－7	9－9	16	ソビエト	
ハンガリー	15	8－6	7－9	15	ブルガリア	引き分け
東ドイツ	22	10－7	12－12	19	ソビエト	

【順位】①東ドイツ②東ドイツB③ハンガリー④ソビエト⑤ブルガリア

84回目の対抗　数ある国際交流のなかでも、その伝統にかけてはハンドボール界に留らずヨーロッパスポーツ界で屈指といわれるスウェーデン×デンマークの対抗戦が、このほどマルモ（スウェーデン）で行われ25－20でスウェーデンが勝った。この対抗戦の第1戦は一九三五年三月コペンハーゲンで行われており、今回が84回目。対戦成績はスウェーデンの55勝23敗6引き分けとなった。両者は今シーズン中にあと1～2回対戦の予定である。

オランダ、イスラエル遠征　今シーズン活発な動きをみせるオランダはこのほどイスラエルに

世界のハンドボール人口

【世界総計】	
▽男子チーム	39,973
▽女子チーム	13,503
▽男子登録人口	921,794
▽女子登録人口	212,242
【男子チーム数】	
西ドイツ	12,361
ソビエト	8,580
スウェーデン	2,425
東ドイツ	2,041
デンマーク	1,982
【女子チーム数】	
西ドイツ	3,226
ソビエト	1,400
デンマーク	1,161
スウェーデン	1,060
東ドイツ	1,000
【男子登録人口】	
ソビエト	349,000
西ドイツ	205,000
東ドイツ	45,000
フランス	37,460
スウェーデン	30,500
スペイン	26,481
デンマーク	26,401
ユーゴ	24,600
スイス	23,000
日　本	19,327
【女子登録人口】	
西ドイツ	44,000
ソビエト	21,000
デンマーク	16,837
ユーゴ	13,687
東ドイツ	13,000
スウェーデン	12,100
オランダ	12,000
ハンガリー	11,185
ルーマニア	11,025
日　本	9,016
【日　本】	
▽男子チーム	1,121
▽女子チーム	561
▽男子登録人口	19,327
▽女子登録人口	9,016

（ＩＨＦ・47年11月発表）

遠征、テルアビブでイスラエルナショナルと2試合を行い13−15、15−12の1勝1敗だった。2試合とも二千五百のファンを集めて行われたと伝えられている。どうやらテルアビブに国際規格の体育館ができた様子だ。

ヨーロッパカップの2回戦（別掲）は七千のファンを動員している。

ブラジル登場か　ブラジル協会はこのほど4月17日からルーマニアで開かれるラテン・カップトーナメントに参加する予定だと発表した。ブラジルは第3回世界選手権（昭33・東ドイツ）出場以来、ほとんどヨーロッパに姿を見せていなかった。来春の第8回世界選手権にもエントリーしている。

西独11人制戦改組　西ドイツ協会は伝統の11人制全国リーグ（ブンデス・リーガ）を今シーズンから廃止する「重大決意」をしたようだ。11人制ハンドボールの祖国としてオーストリア、スイスなどとともにこの競技を孤守してきた西ドイツもついに時流には勝てなかったものなのか。なお、同国11人制選手権は5つの地域リーグの勝者が集結して争うことになる模様。

FA・ギョッピンゲン敗退

ヨーロッパカップ

男子第13回ヨーロッパカップトーナメントは昨秋11月から25ケ国の代表（単独チーム）が参加して各地で熱戦をつづけている。

現在までに準々決勝が終了（一部記録未入電）、ベストフォアが決まり、大詰めも間近かだ。4月来日のFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）は1回戦でCUS・ペローヌ（イタリア）、2回戦でATV・バーゼル（スイス）を順当に降しベストエイト入りしたが、ここで今季絶好調のL・エリクソン（46年来日）の率いるヘルラス・ストックホルム（スウェーデン）と対戦、互いにホームゲームをキープしあった結果、ヘルラスが合計点で2ゴール上廻り、ギョッピンゲンは惜しくも上位進出を阻まれた。

このほか、2連勝を狙うパルチザン・ブジエロパル（ユーゴ）、初優勝目指すMAI・モスクワ（ソビエト）らが勝ち進んでいる。

MAI・モスクワとステアウア・ブカレスト（ルーマニア）の試合はマキシモフ（ソ）、グルイア（ル）の華やかな打ち合いを中心に多くの観衆を魅了する激戦となったがMAI・モスクワが22−14、19−17で勝った。

話題をまいたのはイスラエル代表のハポエル・ラマツガン。同国は昨夏のIHF総会でアジア所属となったが、この大会にだけは参加を許されている。ところが今回は、アラブ・ゲリラの専襲をおそれて対戦チームは大変な気のつかいよう。1回戦の相手デュデリンゲン（ルクセンブルグ）は、政府の助言で試合場、試合時間をいっさい秘密にして対戦、もちろん観衆はゼロだった。2回戦の相手ヘルラスストックホルムは、イスラエル選手の安全を保証できないとして、2試合ともイスラエルでの開催を望み、テルアビブに遠征して消化した。

このほか、今秋日本遠征を計画しているスタディオン・コペンハーゲン（デンマーク）は、2回戦で優勝候補ライプチ・SC（東ドイツ）に11−11、12−15と健斗したが惜しくも敗れた。日本のファンにおなじみのステラ・サンモール（フランス）もライプチヒSCに13−24、11−14で敗れている。

準決勝は3月15日までに終了、決勝は4月8日の予定。

なお、女子（第12回）は1月にスタートしているが、詳細が届いていない。

2月25日現在の男子準々決勝記録は次のとおり

▽男子準々決勝第1戦

FA・ギョッピンゲン（西ドイツ）　19（8−6、11−7）13　ヘルラスストックホルム（スウェーデン）

ロコモテイブ・ソフィア（ブルガリア）　14（6−7、8−4）11　DHFKライプチヒ（東ドイツ）

パルテイザン・ブジエロパル（ユーゴ）　21（10−7、11−7）14　シタルデイア・シタルド（オランダ）

MAI・モスクワ（ソビエト）　22（14−8、8−6）14　ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）

▽同第2戦

ヘルラスストックホルム　21（10−8、11−5）13　FA・ギョッピンゲン

2試合合計34−32でヘルラス・ストックホルムの勝ち

☆　☆　☆

IHF広報　ミュンヘン報告

近着の国際ハンドボール連盟（IHF）広報はミュンヘンオリンピックの興味ある「後評」を掲載している。以下はその抄訳である

久　田　暁
（日本協会理事＝国際担当）

史上初のオリンピック室内ハンドボール競技の優勝者はユーゴスラビアとなった。三位までのチームにIOC会長アベリー・ブランデージ氏がメダルを授与した時、一二〇〇〇人の観客はこの立派な優勝者に活気ある拍手を送った。オリンピックの決勝戦を一言で言えば魅惑的なチームが魅惑的な試合をしてくれた。

ハンドボールの面白さをたっぷり味あわせてくれたユーゴチームにほんとうに感謝したい。ユーゴチームはより力が強く、肉体的コンディションもよりすぐれ、ほぼ同じ水準の選手たちで極めてよく構成されていた。一方、チェコは決勝進出にふさわしく、全選手が強い意志の持主であり、チームはスポーツマンシップの限界を越えることなく決勝戦を終始非常にフェアに闘った。銀メダル、即ち「フェアプレーメダル」である。立派な成果である。

決勝戦および参加チームに関する寸評

ユーゴスラビア（優勝）

オリンピック競技では魅力あるゲームをせねばならぬという重大な使命があるにもかかわらず、ユーゴチームはまったく完璧であった。チームのリーダーであったヨウスイップ・ミルコヴィッチは交通事故で重傷を負ったため出場できなかったが、その穴をダイナミックなラザレヴィッチがうまく埋めた。すばらしいジャンプシューターの専門家ザーグメスターを欠いてもポポヴィッチが活躍した。とにかくユーゴはメンバーが変ったというだけではチーム力は何等弱められることはなかった。やはりオリンピック競技の優勝者にふさわしいものを持っていた。

チェコスロバキア（準優勝）

銀メダル獲得のチェコは得点平均がアイスランドより良かったというだけでやっと本大会出場権を得たのであった。このチームはスェーデン、ソビエトの両強豪との対戦で堅実な試合を行ない、主としてすばらしい攻撃が効を奏して勝利をおさめ決勝進出を果したのである。ソビエトはチェコの両サイドでの巧みな動きを伴うチームプレーによって破れたのであり、チェコのトレーナーはファイトよりもむしろプレーを主とし、トレーニングを行ない、これが功を奏した。彼は世界のトップレベルにある若い選手たちをうまく使ってチームを指導して行くことに成功し、しかもごく短時日の間にそれを成し遂げた。

ルーマニア（三位）

世界チャンピオンのルーマニアはわずかに三位――銅メダルにとどまった。このチームはオリンピック前にどうも満足の行く試合ができなかった。プレ・オリンピックでの試合や他の大会で得られた結果はあまりよくなく、ジョニイ・クンスト氏のオリンピック初優勝という希望には暗い影がさしていた。果たせるかなルーマニアはユーゴに敗れ、東ドイツにはスター、ゲオルガ・グルイアの伝説的な信じがたいシュートによってやっと勝った。この他の際立った選手には旋風のあだ名のあるクリスチアン・ガトウとロングシューター、グーネスであった。

東ドイツ（四位）

世界選手権準優勝の東ドイツは専門家筋ではメダルをとるだろうと予想していたが4位におわった。しかしこのチームは長距離シューターであるカール・ハインツ・オストが片ひざを手術し戦列から離れたことからかなりチーム力が弱まった。それがどうやら対ソビエト戦を失った原因であろう。ソビエトはすばらしいゴールキーパーをもつ鉄壁の東ドイツの守備を猛烈な攻撃で破ったのである。東ドイツはまたルーマニアのグルイアにもかぶとを脱いだ。彼のシュートはユーゴにだけは通用しなかったのだが。しかし全体的にはザイラートレーナーは彼のチームの成績によろこべないという理由もないだろう。

ソビエト（五位）

もし……もしマクシモフが好調だったら（彼はほんの短期間しかプレーできず、かつ何の効果もチームに対して発揮しなかった）、もしクリモフが好調だったら……、しかしこの二人の重要な選手は好調でなかったし、チームは最初から勝つチャンスがなかったのである。チームの個々のメンバーによる努力にも拘らず、特にイシトチエンコ（ゴールキーパー）、イリュジン、クリュエフの努力にも拘らず、間隙は埋められなかった。西ドイツと5、6位決定戦をやったことはソビエトにとっては不本意であったろうが、前回の世界選手権でソビエトは9位にしかなれなかったのであるからまずまずと云えよう。しかし、ソビエトの選手、役員たちはこうした考えはもっていない。彼らが問題にしているのは、チーム力の向上ということよりもむしろ、オリンピック・ハンドボールの日程や組合せである。

西ドイツ（6位）

西ドイツチームは開催国代表としての広い支持者、応援者の期待に十分応えられたとは言えない。西ドイツファンはメダルを期待していたが、専門家達はもっとはるかに現実的な予想をしていた。そして、やはり専門家たちの予想が当っていた。このチームは全力は出しきったようであるが並みのチーム力以上の快挙をあげうるにはとうてい到らなかった。本チームは本大会出場権を得る際に幸運の女神の寛大な御支援を必要としたのであった。ハンス・シュミットとベルント・ムンクの欠場の穴は決して埋めることはできなかった。ランゲとリュブキングは彼等の最良の状態ではなかったし、リュブキングのジャンプシュートは相手チームにとって何等実質的な脅威とならなかった。西ドイツのゴールエリアライン際の守備のまずさには眼をおおうものがあった。

このチームは神経質であり、確実性がなく、そのために時折ラフプレーをしすぎた。第6位——そしてあぶなかしい第6位だった。

スエーデン（7位）

伝統的な好敵手デンマークに勝ったこと——対ハンガリー戦幸運な勝利を得たこと。スエーデンは事実上一つの凱歌をあげた。往年の室内ハンドボールの王者は7位であった。チームはたしかにうれしくはなかったろうが、結果は冷厳としてスエーデンの現在のハンドボール水準を反映している。

ハンガリー（8位）

たくみなパスワークとシュートとの連係による素早い攻撃——振幅のある弾力的な守備。日本、アメリカに快勝して順調なすべり出しは見事だった。予選ではユーゴに16対18の僅差で敗れたとはいえ大変な善戦であった。しかし本大会に入ってグループの中で最下位にしかなれなかったのは腑に落ちない。このチームは対西ドイツ戦の試合におけるいくつかのおかしなレフリーの判定があって「あきらめ」によって負けたといえる。

ノルウェー（9位）

対ポーランド戦は見応えがあった。ドラマチックな延長戦で23対20でポーランドを降した時、ノルウェーの9名の選手たちに絶大な拍手が起きた。しかし、より上位を目論んでいたノルウェー選手たちは、この結果にさしてよろこんだ様子もなく、競技場から観衆に分れを告げる時むしろ悲しげであった。

ポーランド（10位）

ポーランドも10位よりも、もっと上位を目論んでいた、なんとかして！　しかし、ソビエトとスエーデンのいる同じグループでの予選ラウンドはそうとうきびしかった。このチームは遂に本大会出場権すらとれなかった。しかし、ヨーロッパ予選（スペイン）においてアイスランドに負けた雪辱を今やポーランドは果したわけで、この結果には少なくとも満足であったはずだ。

日本とアイスランド（11、12位）

日本は意外にもやっと11位を確保したがミュンヘンにおいて最も生き生きとしたチームだった。日本はアイスランドに勝った——レイキャビックでアイスランドと対戦したことのあるすべてのヨーロッパチームはアイスランドはヨーロッパにおける最も手ごわい相手の一つだということをよく承知している。

日本選手がヨーロッパ的モデルから決して学んでいないことが一つある——それは故意的な反則プレーである。しかし日本がヨーロッパチームに互していくためには、どうしてもより堅固な（しかし、もちろんフェアな）守備を形成しなければならない。このチームはスカイプレーと呼ばれる空間利用のトリック攻撃を高度にかつ変則的にみごとなまでに発達させた。ユーゴとチェコも同じような魅力的な風変わりな技術を編み出している。

デンマーク（13位）

マイナスの驚きである。若駒アメリカに辛勝しての13位。デンマークが前回フランスでの世界選手権でユーゴと銅メダルを争っていたことを考えると、どうもあの時ユーゴに惨敗したことが尾をひき、それ以来選手とトレーナーに次から次へと危機が訪れたようだ。

アメリカ（14位）

向上めざましいアメリカ！

いくつかの主な原因は、すぐれたバスケットボール選手達がハンドボールをはじめたこと、合衆国軍隊が積極的にハンドボールを支援していること、ヨーロッパへ度々遠征して交流しはじめたことなどであろう。このチームは次第にヨーロッパのハンドボール国に迫いつきつつある。アメリカハンドボールの開拓者№1でありアメリカ大陸代表のIHF理事でもあるビューニング博士は彼のチームの活躍に目を細めているだろう。

スペイン（15位）

スペインはやっと15位だったがこのチームはその結果が示すほど弱くなく、むしろ相当力のあるチームである。最下位のチュニジアに対し、最後の試合においてきわどく勝利を握ったのはそれまでの試合でヨーロッパの一流どころを相手に実に精力的な試合を挑み、まずまずの成果をあげていたことによるのである。このチームははげしい、長い試合の連続のあと万策尽きて、矢折れ刀尽きていたということがよくわかる。

チュニジア（位16）

最下位とはいえ、チュニジアには良い点をあげたい。オリンピックを通じて多くのことを学びとり着実に進歩した。選手たちはアフリカの名誉にかけて実に献身的にプレーし、オリンピックが行なわれたためのあわれな犠牲者とは見なされ得ないだろう。（例えば、デンマーク、スペインとの対戦をみたまえ）不利な条件を考えれば立派な成果だった。目立った選手たちはゴールキーパーのモンセフ・ベスベス、ロングシューターのセバブティ、エリア・プレヤーのアレヤ・ハムロウニであった。

レフリーについて

（控え目なことばであるが…）

レフリーの成績は必らずしも満足なものではなかった。選手もトレーナーもそして専門家も異口同音に言っていることは「もしレフリーが知性的に身体的に完全に健康であり、一秒の何分の一かの速さで正確な判定をくだせるならば、ハンドボールの理念にのっとってルールを適用できなくてはならない。」ということだ。ほんの二、三のレフリーチームだけが極めて重要な試合を満足に管理できたにすぎない。次のレフリーたちは熱狂的な大試合を采配するためのすべての問題を処理し得る能力があるように見える——西ドイツのファルクとロスマニト、東ドイツのズィンガーとズィーベルト、デンマークのオウヴァダールとローディル。室内ハンドボールの大試合を管理することは非常にむずかしいということの何よりの証拠である。ウント・レポ、ハイキ・ツオミネン組はオリンピックハンドボール競技終了前に退去させるべきだった。

ニュルンベルグにおいて創設された新判・ルール委員会は今後多くの重要な問題を処理して行かなければならないだろう。（了）

沖縄特別国体エントリー

日本体協などは、今年5月沖縄県で開く沖縄特別国体について準備を進めているが、ハンドボール競技（高校女子8県によるトーナメント）の申しこみ〆切日は4月2日に決まった。一県の構成は監督1、選手11の計12名である。

新連載

ハンドボールのＡＢＣ(1)

～西ドイツ連邦，Ｈ・ケスラー著～

東京大学ハンドボール部・訳
日本協会普及部・監修

私の息子の小さな頃を思いだすと、左の図3のような光景が浮ぶ。

ありとあらゆるものを投げるということは、自然な動作であり、これは飲むとか食べるとかいうものと同様なものであり、たぶん幼児の最初の運動形態なのでしょう。このような活動の段階から運動の衝動は、いろいろな方向に発展し（図4）小学校に入る頃には、子供のズボンのポケットの中にボールが入っており、それは子供の遊び友達にもなる。ボールはまたすぐに他の少年や少女達と仲よくなり、子供達の初めての交友関係を作り出し、ボールがすばらしい先生となる。ボールの弾力性と反撥力は、子供達をボール遊びに熱中させる。

ころがったり、はずんだり、とんだりしているボールをみてわかるようになれば誰でもボールの扱い方を習うようになる。遂にはある特定のスポーツを考えに入れることなくスポーツ向きのボール扱いをおぼえるようになる。この時の練習の形や練習する者の年令は問題ではない。

ボールを扱う基礎として次の事柄に注意をするとよい。

すべての練習時間中、頻繁にボールを手にしておかなければならない。そのためできる限り、すべての生徒に1つずつのボールを与えることが必要になる。

ボールをもっての練習は、ボールを取り扱う機会をできるだけ多くすることが大切である。そしてあまり難しくない次のようなボール運動があるので紹介しよう。

①ボールをもって体育館の中を走りボールを床になげそしてキャッチする。

②ボールをドリブルさせながら競争する（図5）

③次に皆、一ケ所でボールをはずませる。

④誰かジャンプをしながらドリブルをすることができようか?。

⑤誰かこの練習のとき足をあちこち動かすことができようか?

⑥からだを小さくしてドリブルする。

⑦しゃがんだ姿勢で走る。

⑧座ったり、床に臥したりしてドリブルする。

⑨思いついたことは、ちゅうちょせずにやれるようにする（図6 7）

技術について

生れながらの達人はいない。だから私達は練習をする。

ジャンプについてささやかな指示を与える。

頭を高くして、上体を真直ぐさせる。

ジャンプのときには、足は全く静かに着地させる。踵で着地してはいけない。

跳びあがるときと着地するときには、指はほんの少し拡げてできるだけ虚脱状態にする。

そのとき、手をたいらにして、ボールを床にはずませる。

ボールを扱ってみよう。

まずキャッチから始める。子供達は投げることを自然に戸外でやっているからである。

まず第1にすべての生徒にボールを1つずつもたせる。ボール扱いの課題としては、

○ボールを床に落させて、それを両手で受け取らせる。

a、キャッチするとき、両手をボールの上におく。

b、キャッチするとき、両手をボールの下におく。

誰か、ボールを音をたてずにとれるか?

○次にボールを強く床になげつけ、それを両手でとる。

○ボールを両手で高く投げ上げ、それを両手で胸の前で受けとめる。

誰か、ボールを高く上げキャッチし、強く弾ませ、さらにまた高く投げ上げられるか?

この練習（高く投げ上げる—キャッチする—弾ませる—高く投げ上げる）を休みなく行なう。足のつま先から指まで伸したままボールを頭の上でキャッチできるか?

○ボールを片手で高く投げ上げるようにする。

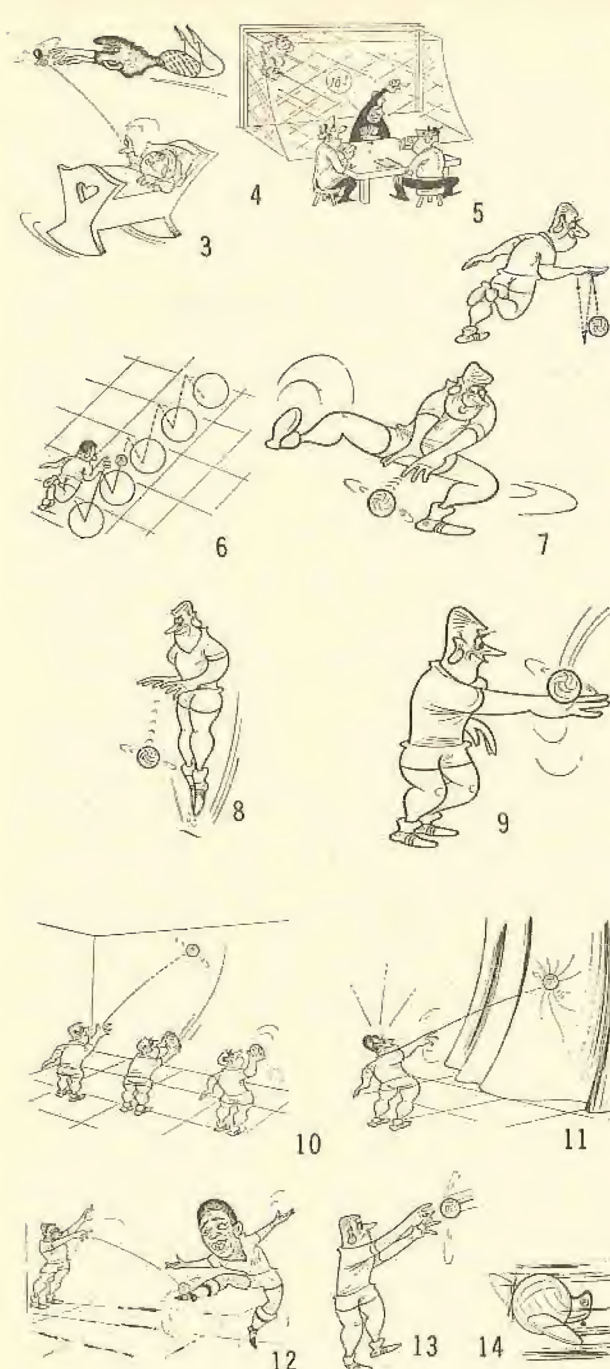
誰かボールを片手でとることができるか?

○遊びとして最後にボールを手の甲でとるようにする（図9）

次に壁を使っての練習をする。

○ボールを壁に向って投げ、軽く弾ませて、そして受け取る。

○壁にボールを投げた後、軽く弾ませずにそれを受取る（それに応





じて、距離をかえる。）
○壁から3m離れた所に立って、矢つぎばやに投げる（図10）。
誰か、ボールを左右交互に投げられるか。
誰か、片手でボールを受取れるか。
さて次に、練習相手を選び同じような課題を行う。
もう一度キャッチのときの確実なハンドリングを示すために、カーテンのボールの受取り方を実証してみよう。
この目的のために、まずボールを壁に向って投げる。ボールがどのように強く弾ね返ってくるかがわかる。それからもしできるなら長いカーテンに向って（図11）あるいは高くつるした練習着に向ってボールを投げる。ボールがカーテンによってどのようにやわらかく受止められ、そして垂直に床に落ちてゆくかがわかる。ペレがそれを私達にみせてくれる。（図12）
キャッチの時はできるだけやわらかく受止めるようにしよう。またこの時、次のことに気つけなければならない。両手をシャベルのような形にする。そして手のひらをボールの方にみせる。両腕はやってくるボールに対して広げて、しかも力をぬいて伸ばす。（図13）
両手は向ってくるボールをからだの方向に導き（カーテンをみよ）受けとめながらボールのいきおいを少なくする。

とんでいるボール

（図14）、ボールの投げ方を教えるときには、練習時間中、何度もボールは正確に投げなければならないということを指導をしよう。
誰が、一番高く投げられるか？
誰が一番遠くへ投げられるか？
誰が早く的にあてることができるか？
競技での動き方を教えなければならない。
たとえば、2つの組を15m離れさせ、各々一列にして向い合わせる。最初の者が走りだし対同向にボールを投げ、一方の列に入る。（図16）。
また、同じ練習を4組にして行なう。各組をコートの四隅につくる。最初の者が対角線にボールを投げて真直ぐに走る。このゲームでボールを2つ3つそして4つと同時に使うと面白くなる。

この練習は集中力とボールと同じく相手がどこにいるかという焦点をあわせることとの訓練となる。

シュート

シュートは砲丸投げや槍投げと似ている。シュートには、力強い投げ方ややわらかい投げ方（孤を描く投げ方）またジャンプシュート、倒れこみシュートがある。

○ボールはドリブルをする時のようにやわらかくもつ（図17）。

○ボールは爪を立てて握ってはいけない（図18）

○投げる時の腕は、高く上げた状態から頭のすぐそばを通って投げる方向に動かす。（図19）

○腕を高く上げるとき、十字架のようにつったてはいけない。猫背のような形で始める方がよい。

○真直ぐに投げるためには、投げるとき、親指で支えることが重要である。

○投げるとき、からだが縮こまってはいけない。真直ぐのばした足の上の方へ、投げる方向へのからびのゆれを導く。（投げるときは、からびを少し伸び上らせるようにする。）

倒れこみシュート

倒れこみシュートはまずみせる。そうすれば、それをまねることができる。

勿論すでにシュートの練習をしたいことがあることを前提とする。そのほうが倒れこみシュートを習得することが簡単であるからである。倒れこみシュートは、投げる姿勢に入っても幾分長くボールを握っている。そのとき、投げる方向に倒れ、投げる方の肩ごしにうまく回転する。（図21）

練習は芝生かマットを使用する方がよい。そうすることによって、下が堅いといってやる勇気を失うこともなくなる。からだを投げる方向に対して真直に向け、かるく曲げたからだをひねれば、そのとき投げる方の肩はもどるようになる。ボールを投げる手はできるだけ長くボールを支えるようにする。そこでシュートができる。

次に2人1組で向きあって立ち、孤を描く（山なりの）ボールや力強い（速い）ボールを投げあう。相手との間隔は、つねに変化させるようにする。まもなくマットを使用しないで練習ができるようになる。

ジャンプシュート

ジャンプシュートは少年少女にとって努力するだけの価値ある目標である。全力疾走からジャンプして"滑走"し、ゴールキーパーに向って、ボールをゴールの中に入れるのは、楽しいことである。（図22）しかし、それは大変難しいことである。なぜならば、走る動作が、ジャンプとシュートに結びつかなければならないからだ。そのときの巧みで入念な動きが早い効果をあげる。ではジャンプシュートの練習の一連の過程を述べてみよう。

コート（体育館）にベンチをおき、目標とする。目標に向って走り、ジャンプをする練習をくり返し行なう。そしてこのジャンプシュートのときには、3歩のリズムが是非必要である。（右ききの人だけのグループと左ききの人だけのグループをつくり、それぞれのグループに適した運動課題を設定する）。

○ベンチを走りこす。

○ベンチをとびこえる。

○片足をベンチの上にのせ高くとびおりる。

○とびおりたら前転をする。

○右足でベンチを走りこす。（右足ききの場合）

○かねまたは、手を打って、時々左足に走るリズムを与える。そのとき左のジャンプする走に力を入れる。

○ベンチをとびこすとき、左足を使う。

○左走でスタートしたりとび上がることを練習する。

○3歩でベンチをこえられるような所にベンチを置く。

左―右―左―ジャンプ

○そしてベンチをとびこえて着地するときも、左足で着地するようにする。

○次に列をつくり次に走るものが手をたたき、前のものがスタートそして3拍子の走りをする。

○手をたたかずに3拍子の走りを練習する。

ジャンプ―着地

左―右―ジャンプ―着地（図23）

このようなリズムをとる練習はジャンプシュートの準備になっており、このような動きは、からだで覚えこまなければならない。この目的のためには、同じような練習方法はまだ他にも沢山ある。すべての練習時間は走り続け、練習時間を無駄にしてはいけない。ジャンプが上手にできるようになれば次の段階に進む。

今度はボールを使って練習をする。

ボールをもってベンチをとびこえ着地した後反対側の最初の者にボールをパスする。

ボールを最初の1歩のときにつかみ、ベンチを越えて着地後ボールを投げる。

今度は、着地前にボールを投げるようにする。投げ方は任意で結構である。特に注意することは、スタートとジャンプを正しく行なうことである。

次第に投げ方をかたちづくるようにする。ジャンプする前にすで

に投げる方の肩を後に引いておく。

ジャンプのときに投げる方の腕を高く上げるようにする。振り上げる足は横につきだし直角に曲げるようにする。シュートはジャンプの最高点で行なう。

次の運動の課題は運動を正確に行なうのに役立つ。

○体育館でマットの前でジャンプしとびこえて着地する。
○ゴムひもを高くはってそれをこしてボールを投げる。
○高い跳箱をこしてボールを投げる。
○ゴールのバーをこしてボールを投げる。
○目標に向ってボールを投げる。
○パートナーにボールを投げる。
○動いているパートナーにボールを投げる。
○印をつけたゴールの角にボールを投げる。
○高く維持されたメディシィンボールをねらって投げる。(図15)
○ころがっているメディシィンボールめがけて投げる。(図15)
○環中を通してボールを投げる。

次に40人いるクラスが丁度できる練習方法(形態)の応用を考えてみよう。

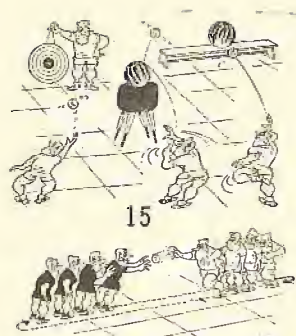
すでに述べたような(40人クラス)例について言及するとまずクラスを4つの組に別け、各組を約10×15mの長方形の4角になるように指示する。

時計回りにボールを組へと投げる。自分の投げたボールの後を走り次の組に入る。(図24)

すでに述べたように、この練習形態では、ボールの数を増すと大変面白くなる。

このように前述のボール投げの方法をすべて練習させる。

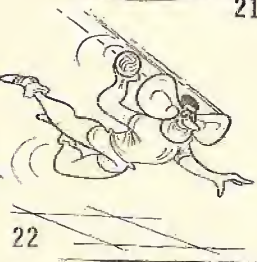
ジャンプパスをゆられている〝ひも〟を通して行なうのは非常にすばらしい練習方法である。


15

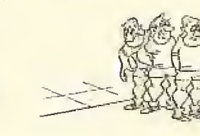

21

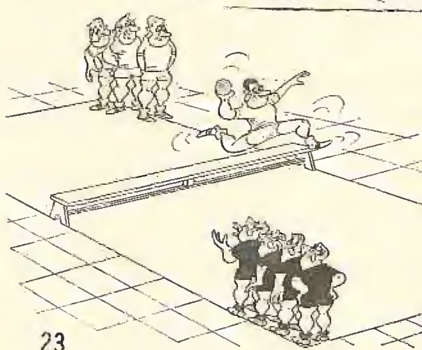

17

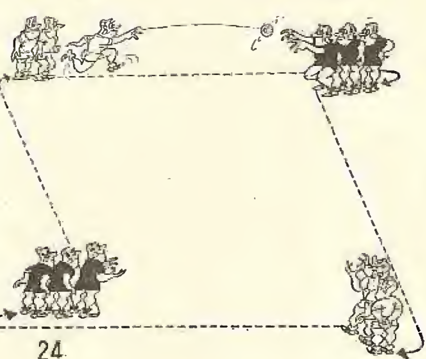

16


22


18


20


19


23


24

今回から、このハンドボールのABCを連載していきます。この本は初心者向きに作られている本で、豊富なマンガを多く使いきわめて判り易く説明されています。各チームにいくらかでも参考になればと思います。この企画、普及部の渡辺部長の熱心なすすめによってふみきりました。今後二〜三度にわたって連載していくつもりです。(編集部)

青森ク、ムネカタが東北二冠

各地の記録

第9回東北総合室内選手権は1月27、28日の両日郡山市の日大工学部体育館を主会場に6県の代表男子11、女子12が参加して行われた。

男子は準々決勝で3連勝を狙う岩手教員をはじめ福島、宮城の教員勢が若さにあふれた高校チームに押しまくられ揃って敗退する波乱があり、一般から唯一チーム勝ち進んだ青森クが決勝で湯沢高（秋田）を制し初優勝を飾った。青森代表の優勝は初。

女子は東北ムネカタ（福島）が準決勝で前年優勝の和洋女高（秋田）を降し、決勝では全涌谷（宮城）に後半逆転勝ちして2年ぶり2度目の優勝をとげた。青森ク、東北ムネカタとも昨秋の第25回東北選手権優勝についで〃東北二冠〃である。

▽男子1回戦（3試合）

聖光学院高（福島）16（6 10－7 4）11 秋田南高（秋田）

青森ク 27（16 11－5 4）9 大石田高（山形）

宮城教員 22（13 9－3 9）12 花巻北高（岩手）

▽同準々決勝

東根工高（山形）19（9 10－9 4）13 福島教員

聖光学院高 17（7 10－10 5）15 岩手教員

湯沢高（秋田）23（12 11－7 7）14 宮城教員

青森ク 18（11 7－6 2）8 仙台育英学園（宮城）

▽同準決勝

青森ク 19（10 9－6 5）11 聖光学院高

湯沢高 10（3 7－5 3）8 東根工高

▽同決勝

青森ク 13（7 6－6 4）10 湯沢高

▽女子1回戦

涌谷高（宮城）14（8 6－3 3）6 全青森西高（青森）

六郷高（秋田）13（6 7－2 0）2 米沢女高（山形）

岩手女子高（岩手）11（4 3－4 3：2 0－2 0：1 1－1 0）10 竹田女子高（山形）

全福島高校選抜 12（7 5－0 1）1 三本木高（青森）

▽同準々決勝

和洋女子高（秋田）10（8 2－0 1）1 岩手女子高

東北ムネカタ（福島）14（7 7－0 1）1 涌谷高

全福島高校選抜 12（6 6－3 2）5 花巻農高（岩手）

全涌谷（宮城）14（9 5－2 2）4 六郷高

▽同準決勝

東北ムネカタ 10（5 5－3 2）5 和洋女子高

全涌谷 6（1 5－0 1）1 全福島高校選抜

▽同決勝

東北ムネカタ 8（6 2－1 4）5 全涌谷

道選手権は北大が3連勝

第12回北海道室内選手権（男子のみ）は昨冬12月24、25の両日函館大谷高体育館に8チームが参集して行われ北海道大が函館大谷高OBを大差で破り3年連続4度目の優勝を飾った。同時に行われた北海道高校新人戦は男子が函館東、女子が函館東の優勝に決まった。

▽1回戦（＝準々決勝）

北大 24（13 11－8 10）18 函館有斗OB（B）

北海道教員 22（12 10－11 7）18 室蘭東高OBク

大谷OB 14（6 8－5 7）12 北見工大

函館有斗OB 23（11 12－8 4）12 北大（B）

▽準決勝

北大 27（13 14－8 13）21 北海道教員

大谷OB 14（5 9－6 6）12 函館有斗OB

▽決勝

北大 25（15 10－10 5）15 大谷OB

▼第12回全道高校生新人大会

▽男子準々決勝

大谷 13－11 室蘭東

函館有斗 28－9 札幌啓成

函館工 27－7 函館商

函館東 10－6 札幌南

▽同準決勝

函館有斗 16－11 大谷

函館東 15－8 函館工

▽同決勝

函館東 10（8 2－4 4）8 函館有斗

▽同女子準決勝

函館東 6－3 登別大谷

登別 10－9 函館商

▽同決勝

函館東 2（2 0－0 0）0 登別

京都ク、逆転で初優勝飾る

第3回近畿クラブ選手権（男子のみ）は昨秋、大阪・大淀中体育館に2府1県から12クラブが参加して行われ京都クが決勝で佐野工ク（大阪）を逆転で破り初優勝した。前年優勝の奈良クは準々決勝で敗退。

▽1回戦

デンタルス（大阪）29（17 12－6 17）23 鶴見ク（大阪）

桜井商OB（奈良）17（10 7－6 6）12 八尾ク（大阪）

京都ク 27（12 15－6 6）12 ラックス

大商ク（大阪）17（10 7－5 9）14 都島工ク（大阪）

▽準々決勝

東住吉ク（大阪）25（13 12－5 5）10 デンタルス

京都ク 30（15 15－8 10）18 桜井商OB

添上ク（奈良）22（9 13－7 8）15 大商ク

佐野工ク（大阪）25（10 15－9 5）14 奈良ク

▽準決勝

京都ク 26（8 18－5 7）12 東住吉ク

佐野工ク 19（7 12－5 9）14 添上ク

▽決勝

京都ク 23（12 11－6 13）19 佐野工ク

四国でもクラブ選手権

四国クラブ選手権がスタート、昨年12月17日松山で男子のみ2クラブによって行われ高知クが愛媛クを破り初代のチャンピオンチームとなった。

高知ク 21（9 12－6 6）12 愛媛ク

大同製鋼、貫録の3連勝

愛知県の47年度選手権チームを決める第5回愛知リーグは県内3パートの各上位2チームが参加して行われ、全日本実業団1位の大同製鋼が中京大らをおさえ3年連続優勝を飾った。女子はブラザー工業が中京大に大勝、初優勝した。

▽男子

中京大（学生）16（8 8－5 0）5 名城ク（クラブ）

桜丘会（クラブ）19（8―10、11―9）19 トヨタ車体（実業団）
引き分け
大同製鋼（実業団）26（13―3、13―4）7 名城大（学生）
大同製鋼 35（18―8、17―3）11 桜丘会
名城大 14（5―4、9―8）12 名城ク
中京大 25（11―7、14―5）12 トヨタ車体
中京大 12（8―4、4―5）9 名城大
大同製鋼 30（15―7、15―2）9 トヨタ車体
桜丘会 21（11―13、10―7）20 名城ク
大同製鋼 21（11―11、10―9）20 名城ク
名城大 24（8―8、16―5）13 トヨタ車体
桜丘会 17（8―8、9―9）17 中京大
桜丘会 20（9―7、11―11）18 名城大
引き分け
トヨタ車体 26（12―8、14―7）15 名城ク
大同製鋼 24（11―3、13―10）13 中京大

【順位】①大同製鋼5戦全勝②中京大③桜丘会④名城大⑤トヨタ車体⑥名城ク

▽女子
ブラザー工業 31（14―3、17―0）3 中京大

岩手の王座は教員

▼昭和47年度岩手県王座（男子）決定戦（1月7日・花巻市民体育館）
岩手教員（一般）19（10―10、9―6）16 花巻北高（高校）

▼第15回岩手県総合室内選手権（1月・花巻農高体育館ほか）

▽一般男子準決勝
岩手教員 28―9 一関工専
岩手大 16―15 盛岡商友会
▽同決勝
岩手教員 26（16―14、13―11）25 岩手大
▽高校男子準々決勝
花巻北 10―6 盛岡商
一関工 11―9 生活学園
花巻農 13―9 岩手
盛岡四 10―9 盛岡一
▽同準決勝
花巻北 8―5 一関工
盛岡四 9―7 花巻農
▽同決勝
花巻北 12（7―3、5―3）6 盛岡四
▽高校女子準々決勝
岩手女 5―0 大東大原
花巻北 3―1 平舘
花巻農 6―5 盛岡二
花巻南 15―0 一関修紅
▽同準決勝
岩手女 5―4 花巻北
花巻農 7―4 花巻南
▽同決勝
岩手女 8（4―3、4―1）4 花巻農
▽男子エキシビジョン
白亜ク 25―20 花巻ク

女子で小禄が7連覇

▼第8回沖縄県高校新人大会（1月・沖縄高）

▽男子準々決勝
宮古 16―8 沖縄
浦添 20―4 本部
知念 16―7 豊見城
糸満 16―10 南農
▽同準決勝
浦添 19―9 宮古
知念 12―9 糸満
▽同決勝
知念 12（9―1、3―6）7 浦添
知念は初優勝
▽女子準々決勝
沖縄 6―3 那覇
興南 4―2 コザ
小禄 10―8 知念
那覇商 17―8 糸満
▽同準決勝
興南 15―0 沖縄
小禄 14―6 那覇商
▽同決勝
小禄 10（5―2、5―2）4 興南
小禄高は7年連続優勝

男女とも添上強し

▼昭和47年度奈良県高校選手権兼新人大会（1月・育英高ほか）

▽男子準々決勝
奈良 12―9 郡山
添上 22―7 橿原
生駒 16―6 一条
東大寺 12―3 正強
▽同準決勝
添上 6―5 生駒
奈良 8―6 東大寺
▽同決勝
添上 13（8―1、5―4）5 奈良
▽女子準決勝
添上 15―3 桜井商
郡山 6―4 一条
▽同決勝
添上 5（2―0、3―1）1 郡山

国立、中大附属を破る

▼東京都高校新人戦（1月）

▽男子準々決勝
中大附 15―10 国分寺
明星 13―5 城北
国立 18―11 鳥山工
東村山 14―11 創価
▽同準決勝
中大附 14（延）12 明星
国立 11―4 東村山
▽同決勝
国立 12―8 中大付
国立（くにたち）高は初優勝
▽女子準々決勝
桜水商 7―0 三商
江戸川 4―3 白鷗
江東商 10―6 二商
小岩 7―6 国芸
▽同準決勝
桜水商 13―3 江戸川
江東商 9―0 小山石
▽同決勝
桜水商 4―3 江東商
桜水商は3連勝

群馬教員が2連勝

▼第13回群馬県総合選手権（1月・前橋商高体育館）

▽男子準々決勝
群馬教員 21―18 前橋商高
富岡高OB 25―13 前橋工高
光電工業 23―14 新町自衛隊
前橋工OB 14―11 富岡高
▽同準決勝
前橋工OB 17（延）16 光電工業
群馬教員 25―20 富岡高OB
▽同決勝
群馬教員 20（10―9、10―7）16 前橋工OB
▽女子1回戦（3試合）
前橋市女高 9―8 下仁田高
桐生女高 15―4 群女短大付高
藤岡高 9―6 前橋東商
▽同準決勝
前橋ピジョンズ 24―4 藤岡高
前橋市女高 7―2 桐生女高
▽同決勝
前橋市女高 14（5―7、9―6）13 前橋ピジョンズ

男子で弘前南が進出

▼第3回青森県教育長杯争奪高校選手権（1月・弘前市民体育館）

▽男子決勝リーグ
弘前南B 14―3 鰺ケ沢A
柏木農 15―3 鰺ケ沢A
弘前南B 9―8 柏木農
▽女子決勝リーグ
青森西 14―1 鰺ケ沢
柏木農 11―6 青森
青森西 12―2 三本木

柏木農 4—3 鰺ヶ沢
青森西 19—0 青森
三本木 20—4 鰺ヶ沢
三本木 8—3 青森
青森西 22—5 柏木農
三本木 11—8 柏木農
青森 10—1 鰺ヶ沢
【順位】①青森西②三本木③柏木農④青森⑤鰺ヶ沢

二和家具、3大会で快勝

▼岐阜県総合選手権（1月・岐阜県民体育館）
▽男子準々決勝
岐阜イーグルス 13—11 岐阜西エク
岐阜大 19—12 長良ブレーブス
岐阜教員 記録不明 帝人製機
二和家具 21—12 岐阜南高
▽同準決勝
岐阜イーグルス 18—17 岐阜大
二和家具 20—15 岐阜教員
▽同決勝
二和家具 16（8—6 8—9）15 岐阜イーグルス
▽女子1回戦（＝2試合）
大垣農高 11（延）9 県岐阜商高
養老女商高 8—4 岐阜南高
△同準決勝
大垣農高 記録不明 南嶺会
養老女商高 9—3 加納
▽同決勝
大垣農高 7（4—0 3—4）4 養老女商高

▼昭和47年度秋季岐阜リーグ（一般男子）は9チームが参加して8週間にわたって行われ二和家具、岐阜イーグルス、かがり火クの二者が7勝1敗で首位に並び得失点差で二和家具が優勝した。春季1位の岐阜教員は3勝5敗で6位に落ちた。
【順位】①二和家具②岐阜イーグルス③かがり火ク④長良ブレーブス⑤大洋新⑥岐阜教員⑦鏡島イーグルス⑧岐阜歯科大⑨ヤンガース

▼本誌でも紹介され評判となった岐阜県大垣市のクラブ大会「水曜リーグ」は昨年末5チーム2回総当りの全日程を終了、二和家具が日本耐酸壜、三洋電機、帝人製機、東ク、大平洋工業らをおさえ9勝1分で優勝。
初参加の女子は大垣農高OGが紅葉会、南嶺会をかわして首位を決めた。

大崎電気勢が1、2位

▼第7回埼玉県総合選手権（1月浦和市立体育館ほか）
▽男子準々決勝
大崎電気C 28—16 春日部高
大崎電気D 30—14 浦和南高
川口工高 14—12 全秩父
大崎電気B 31—9 浦和市高
▽同準決勝
大崎電気B 29—15 川口工高
大崎電気C 20—19 大崎電気D
▽同決勝
大崎電気B 21（9—8 12—5）13 大崎電気C
▽女子準々決勝
深谷女高 21—1 浦和西高
行田女高B 14—1 浦和南高
浦和市高 11—6 川口女高
深谷OG 15—3 行田女高
▽同準決勝
深谷OG 11—10 浦和市高
深谷女高 11—0 行田女高B
▽同決勝
深谷OG 9（4—5 5—3）8 深谷女高

賑やかにハンドボール祭

▼第8回宮城県ハンドボール祭（1月14日・宮城県スポーツセンター）
一般女選抜 14—2 高校女子新人
涌谷高(女) 13—9 高校女子選抜
県協会OB 14（分）14 高校男子選抜
育英高(男) 13—8 高校男子選抜
一般男子選抜 19（8—6 11—10）16 学生選抜
このほか宮城教大付属小学校の模範試合が初めてプログラムに組みこまれ詰めかけたファンの喝采をあびた。

▼第3回女子（第1回）鳥取県室内総合選手権（1月・米子市体育館）
▽男子準々決勝
倉吉工高 不戦勝 自衛隊米子
フェニックス 23—14 倉吉産業高
米子工専 19（延）17 境港工高
境港市役所 13—9 米子ク
▽同準決勝
倉吉工高 24（延）21 フェニックス
境港市役所 30—7 米子工専
▽同決勝
境港市役所 28（13—3 15—2）5 倉吉工高
▽女子決勝リーグ
倉吉西高 11—2 米子南商高
倉吉産高 2—1 倉吉西高
倉吉産高 14—2 米子南商高
【順位】①倉吉産高②倉吉西高③米子南商高

▼栃木県高校新人大会（1月・国学院体育館）
▽男子準々決勝
矢板中央 21—6 石橋
馬頭 21—3 宇都宮工
足利工 11—9 烏山
足利商 8—6 国学院栃木
▽同準決勝
馬頭 11—9 矢板中央
足利工 12—4 足利商
▽同決勝
足利工 9（2—0 7—8）8 馬頭

中学大会記録

▼岐阜県室内選手権（1月・岐阜県民体育館）参加・男12、女15
▽男子準々決勝
長森 13—12 那加
加納 16—10 蘇原
境川 18—11 東安
笠松 23—16 今尾
▽同準決勝
長森 15—11 境川
加納 18—6 笠松
▽同決勝
加納 13（4—3 9—2）5 長森
▽女子準々決勝
境川 16—3 関ヶ原
加納 16—3 南濃
笠松 9—6 興文
長森 10—4 今尾
▽同準決勝
笠松 12—7 境川
加納 12—7 長森
▽同決勝
加納 10（4—2 6—7）9 笠松

編集後記

◇……「各地の記録」今月も〝積み残し〟するほど多くの寄稿がありました。
最近、多くの投稿が本誌宛寄せられるようになり、お礼を申し上げます。その中で本誌に採用できなかったものに関しては、この欄で触れていきたいと思います。
◇……本誌の各種大会戦評について意見を寄せられたS・Tさんへ。本誌の戦評は技術的論評よりも記録を残す〜得点経過と雑観的要素〜ことに重点をおいています。
後年、あの時速攻をすべきだったというような〝批評〟よりも、誰の得点によって勝ったというような〝史実〟の方が貴重だと判断するからで、各試合を見れなかった読者からもその面の支持が大きいのです。しかしこれまで国際試合などで試みた技術評の別欄扱いを今後は国内大会でもどしどし採り入れ、技術論を中心とした戦評を待望する読者にも応えたいと思います。

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一〇六号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十八年二月二十五日印刷 昭和四十八年三月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百円（年間購読料千八百円）